とある変体の重力制御

しょうゆさし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある変体の重力制御

【Ｎコード】
Ｎ６０３２Ｔ

【作者名】
しょうゆさし

【あらすじ】
少年は死んでいた
実に、実に下らない理由で
そして少年は、ナニカの意志に従った
『とある世界へのトリップ』
一方通行（アクセラレータ）大好きな少年・・・いや
”女”は、重力を制御する力を手に入れた
『重力制御（グラビティ・コントロール）』
『この力は、一方通行との絡みだけに使う――――！！』

主人公（変体）の願いは叶うのか？

※バトルの時、大気がどうたらこうたらと科学的なことが出たりしますが
　専門家では決して無い上、片手間でググっただけなので、間違っている可能性
　大爆発です。　スルー推奨、もしくはやんわりご指摘いただけるとうれしいです

１０／２９　タイトル、変体で合ってます
　変な人（変態）なのですが
　変体（男を恋愛対象にしたり　異常に慣れが早いので）でもあるので。
　あと、台本形式やめました。　直しはしませんが。

０Ｎ　一方好きの変質者（前書き）

文才が・・・ほしいんだぜい。。

0N　一方好きの変質者

ある、国の

ある、高等学校の

ある、晴れた日の

ある、午後のことだった

ある、青年は

ある、失態（ミス）を犯して

ある、理由で——

『死んだ』

ある、国の　高等学校の　午後

そこでは、２人の少年が会話をしていた

「いやー・・・一方さン　マジパネェわ」

「まーた禁書目録(インデックス)か・・・他の話題無いんですか？
　確かに名作だとは思うけども・・・」

一方の少年は、顔を上気させ”とある魔術の禁書目録”に登場する
『一方通行(アクセラレータ)』について語る

そしてもう一方の少年はその様子を、なにかかわいそうな物を見る目・・・
たとえば、解剖用のカエルのような目で見ている

「オイ、それキモチワルイ物を見る目じゃねェか・・・なンでだ！
　いまどき禁書目録(インデックス)なんか、学校の図書館にも置いてるぜェ、ダンナ！」

バンバンと机を両手で叩き、猛烈に講義する少年

「ダンナってなんだ　つーか、お前一方通行(セロリ)以外のこと何も話さないじゃん
　変体丸出しすぎ」

と、それに対しあくまでも冷静なもう一方少年

「なっ・・・この俺のどこが変体だってェェ！！？」

バァン！　より、強く机を叩き、立ち上がる少年

「授業中ノートに一方通行のラクガキしかしてねーとことかだろ
もうそれオタクてレベルじゃねーぞ　もう変体だよ畜生
そのくせ話の設定はよく理解しやがらねーし」

「ぐっ・・・ア、一方通行（アクセラレータ）だけじゃねェーよ！
ちゃンとあわきんも書いてますゥゥ！！」

「いや、同じだからな？」

「木ィィ原くンよォおおおおお！！
なンで俺をそンな変体にしたィンですかァあああ！？」

「俺、木原じゃナーイ」

「その冷ややかな反応ムカつくンだよゴルァアアアアアア！！」

と、一方通行について語っていた少年はついに壁に頭を打ちつけ始めた

ガン！ガン！と鈍い音があたりに響き渡り、いままで『何時もの奇行だ、ほっとけ』みたいな
ノリだった他のクラスメイトも、さすがに心配しだした

「おーい　このセロリマニア
戻って来ーい」

そこに、更に煽りをかけた（本人にその気はなかったのだが）ものだから、よけいに激しくなる

「一方さんディスってんじゃねェぞォおおお！！」

ガンガンガンガン！！
まるで痛みなど感じていないかのように、壁に頭を打ち付ける
そしてついには、血が流れ始めた

「いや、だから・・・ちょ！！
血出てる、血ィ！！
死ぬぞ！？」

「くぁｗｓでｒｆｔｇ死ふじこｌｐ；@：」

「死ふじこってなにィィィ！？」

・・・少年の意識は、闇に堕ちた

死因～錯乱から来る自傷行為による、ショック死

『うわー・・・近年稀に見る恥ずかしい死に方だな、コリャ』

少年の耳に、若い男の声が捕らえられた

と、同時に意識が戻る

「（ここは・・・）」

そこは、ナニモナイ処だった

「ンだァ、此処は・・・」

こんなときでもぶれずに一方通行口調である
さすが変体　ぶれない

「（なンか失礼な言葉が聞こえてきたんだが・・・
あ、もういーや　この喋り方疲れる
やっぱ一方さんパネェわ）」

『おーい・・・無視ですかー？』

「え・・・誰？」

と、そこには、ナニモナイ処に、浮遊している1人のナニカがいた

それが『人ならざるもの』ということは彼にも容易に想像できた

「（つまり俺は死んで・・・最後の審判ってヤツかね？）」

その”ナニカ”を目にしたことで、今までのことがフラッシュバックのように蘇り

状況を彼なりにだが理解した

と、人ならざるものは、彼の思考を読んだのか、微笑しながら否定した

『いや？　そうじゃないよ

裁いてほしいならそうするけど、理由はどうあれ自殺、しかも親より先に死んだから
三途の川のほとりで鬼に追いかけられながら永遠に石を積む羽目になるけどいいかい？
たとえ、なにかの間違いがあって数百兆分の一位の確率で石をつめても、その先は地獄だよ？』

「全力でお断りさせていただきます」

『うん、それでいい
ま、君には選択肢が２つある』

まず一つ、とナニカは人差し指を立てる

『自らの死を認めず、地上を永遠とさまようか』

２つ　これが本題なんだが・・・とナニカは中指を立てる

『別世界・・・わっかりやすく言えば
”とある～”世界に行って貰いたい
超能力は大能力以上のものを１つ、僕が適当にチョイスして
付加しておくよ・・・」

「・・・・・・え？」

あまりに突拍子も無い提案だったので、思わず聞き返す

『？　何か依存があるのかい？」

「そんなことをして、アンタに何の得が？」

するとナニカは、なんだ、そんなことかといわんばかりの表情を浮かべ、言い放った

『暇つぶし　じゃ、異存ないみたいだし飛んでもらうよ
基本の使い方だけは叩き込んであげるけど、応用は自分で利かせてね
君の能力は・・・超能力(レベル5)の重力操作(グラビティ・コントロール)だよ
頑張ってねー』

少年の意識は、再び闇に飲まれた

０Ｎ　一方好きの変質者（後書き）

待って！！
見捨てないで！！

ちなみに主人公はゲイではありません

だって性別がうわなにをするやめ（ｒｙ

1N　性転換した変質者

「（・・・・・・さっきのアレ、マジ？）」

少年は、気がついたら町の中に立っていた

周りを見渡すと、溢れんばかりの人、人、人

そして、その人々が全員こちらを見ている

「（・・・えっ？）」

不思議に思った彼は、あたりを見渡す

すると、彼の目に全裸の女性が映った

「なっ・・・！？」

驚いて体を引くと、なんと女性も同じ動きをした

試しに、手を振ってみる

相手も手を振る

ジャンプしてみる

相手もジャンプする

アカンベーしてみる

相手も（ｒｙ

ああ、そうか・・・　少年は悟った

「コレ俺かよォォォォ！！？」

つい、叫んでしまったが　それはなじみのある何時もの声でなく、
甲高い女性のものだった

「（なんなんですかこの状況はァァァ！！
　ターミネーターじゃねーんだから裸で転移はねーだろォォ！！
　つーか何で女ァ！！）」

色々なことが起きすぎて、訳が分からなくなっている少年・・・いや、少女

とりあえず裸で往来の真ん中にいるとジャッジメントさんが来そうなので
裏路地に駆け込む

「（ひとまず、人の目はなくなった・・・さて）」

自然と、自分の胸についている球体に目が行く

無駄に威圧感を放つソレは、軽くＥカップはあろう大きさだった

「（いかんいかんいかんいかんいかん）」

少女は、必死で煩悩を振り払う

しかし、これからどうすればいいのだろうか？

「（能力つかえるって言っても・・・どんなやつだっけ？
重力操作？　・・・敵を押しつぶすとかか？）」

などと考えていると、なんとも下品な笑いが聞こえてきた

「グヘヘヘ、姉ちゃん裸でこんなとこに来て、誘ってんのか？」

「ハァ、ハァ、早くヤッちまいましょうぜ、兄貴！」

わらわらわら・・・見るからに『悪人（キリッ』みたいな連中が１０数人、そこにいた

全員、此方にベトベトした視線を向けている

「（やっぱーい　やっぱーい　やっぱーい
いや、裏路地に逃げたのは不用意だったけどさぁ！！）
不幸だ・・・」

「不幸ぅ？　姉ちゃん、男漁りに来てるんだろ？
よかったじゃねーか　精力満タンの男が何人も釣れて」

グヘヘヘヘヘ、再び汚い笑い声が響く

「（逃げなきゃ逃げなきゃ　ちくしょう！
精神男なのに男に犯されてたまるか！　あ、一方さんならＯＫです）」

さすが変体、絶望的状況でもぶれない

と、直後　直接頭に響くような声が聞こえた

あのナニカの声だ

『あー、そのスキルアウト達だけどさ、能力使って倒してみたら？
なんか逃げ腰全開だけど、君レベル5だよ？』

「（その手があった！！）」

少女は、まず能力を発動するべく、なんかチカラを込めてみる

すると、頭の中に一通りの計算式が浮かぶ

「（・・・これは）」

そして、自分の足に重力を下向きに何倍か掛かるようにし地面を踏む

ビキィッ・・・地面に大きな亀裂が入った

スキルアウト達も、明らかに動揺している

「ク・・・何、この力・・・便利すぎるだろ・・・」

少女は、俯き、自分の入れた亀裂を眺めながら、ブツブツと何かを
つぶやく

そして身を低くかがめて、こう言い放った

「悪ィが・・・こっから先は一方通行だ！！」

先ほどと同じ要領で、足にかかる重力を増やして後ろに蹴り、前へと飛ぶ

そして次は前方へ重力をかけ、前へ落ちる

「ク・・・お前ら、怯むな！」

と、スキルアウトの中でもリーダー格の者が他の人物の統制を図るも、時すでに遅し

3メートルほどの間は一瞬でつめられ、重力を付加した拳は容易にスキルアウトの体を砕く

抵抗するものは、皆重力を大きくされ、その場にひれ伏すことを強要される

「いいねぇ、最高ッだねェ、この能力（チカラ）！！！
さぁて・・・どう料理してやろうか」

と、少女は全裸なのも忘れてｗｋｔｋしていたのだが

突如肩に焼け付くような衝撃を覚える

肩を見ると、ナイフが深々と突き刺さっていた

どうやらスキルアウトの内の1人が油断しきっている彼女の後ろに

回っていたようだ

その顔は、恐怖に怯え、小刻みに震えており　唇など紫に染まっていた

「・・・心臓を狙わなかったのは、失策だったな　三下」

痛みで卒倒しそうなのを無理やり押さえ、スキルアウトを睨みつける

ヒッ・・・と声を上げどこに隠していたのか銃を構えるスキルアウト

「（やべ・・・死んだか？）」

うおおおおお！　声を上げ、トリガーを引き、引き金に指を掛けるスキルアウト

痛みのせいでろくに演算も出来なくなった彼女は、これを眺めることしか出来なかった

ズバン！　軽い爆発音が、辺りに響き渡る

だが、その銃口から射出された弾は、彼女に当たることは無く、ビルの壁へと命中していた

「・・・危なかったですわね」

彼女を助けた、ツインテールの少女は、自身の服を彼女へかぶせるとスキルアウトのほうを向き、腕の腕章を見せつけ、言い放った

「ジャッジメントですの！

殺人未遂の現行犯で、拘束します！」

そう、その少女は風紀委員であり、超エリート校　常盤台中学に通う、大能力者（レベル4）

「白井、黒子・・・！？」

白井黒子　その人であった

1N　性転換した変質者（後書き）

黒子もいい変体仲間になる気がする

ちなみに最初写ってた少女は、ビルのショーウィンド的なものに写っていたと脳内補正をお願いします（↑

2N　さっそく人体改造した変質者（前書き）

※　作者の医療知識は０です！
腕神経叢なんたらは『へーそうなんだー（棒）』みたいな
感じで流してください！（土下座）

2N　さっそく人体改造した変質者

「ジャッジメント・・・は、はは・・・まだガキじゃねぇか！！
クソが、邪魔しやがって！！　死ねァ！！」

スキルアウトは、再び銃を構える

その様子を、呆れたような目で見つめる黒子

「今は、怪我人を早急に搬送する必要がありますの
少し・・・黙っていてください！」

鉄矢をテレポートさせ、スキルアウトを地面へ縫い付ける

そして、仕事は終ったとばかりに肩に怪我を負った彼女のほうを振り返る

――――――が、そこに彼女はいなかった

「！？」

辺りを見渡すと、少しはなれたところに倒れている彼女を発見、すぐに駆け寄り

意識があるか確かめる

「だ、大丈夫ですか！？
どうして動いたりしたんですの！」

「・・・・・・う」

とにかく！　と言って彼女を背負う黒子

「話は治療の後です！」

☆★☆★☆★@★☆★☆★☆

ｓｉｄｅ　黒子

「左腕を・・・切断！？」

さっき助けた女性を、病院まで能力で移動させ、診断してもらい

３時間ほど経った所で連絡を受け、病院に向かいました

すると腕神経叢、という腕を動かす神経が途切れており、治療後もリハビリが必要という事で

本人の意思で、切断することになったというのですが・・・

「納得いきません！　切断する必要があるのですか！？」

と、問いただす

カエル顔の医師は、あごを撫でながら

「と言っても本人の意思だし、切断した腕の変わりに

取り付けてほしい技手があるとのことだよ？」

義手・・・？

「まぁ、そこらへんは医者や他人の詮索するところではないよ」

グッ・・・黒子は黙り込む

なぜか深入りしてしまったが、あの女性は他人だ

だが、なにか彼女とは通じるものを感じたのだ

他人とは思えない、そう、同好の士というか・・・・・・

「と、いうかもう付けたんだけどね　義手」

「早っ！！？」

「術後でまだ体力が回復しきっていないから
事情聴取とかは控えてほしいな、退院するまでは」

「・・・・・・わかりましたわ
でも、名前を聞くくらいはよろしいでしょう？」

いいや、とカエル医師は首を振った

「人と話すだけで、体力は結構落ちるものなんだよ
あと、彼女の傷、スキルアウトにつけられたって本当かい？」

どうしてそんなことを、といった顔になる黒子

「・・・本当みたいだね

だったら逃げようとしたのも頷けるね」

「どういうことなんですの？」

話においていかれて、不満げな黒子

「彼女、最近学園都市に越してきた、超能力者（レベル5）なんだよね」

「超能力者（レベル5）ぅぅぅぅぅ！！？」

反射的に叫ぶ黒子に対し、冷静に返すカエル医師

「うん、超能力者だからスキルアウトごときに負けたのが
悔しかったのかもね」

と、カエル医師が言うと、病室のなかから彼女の叫び声が聞こえてきた

「負けてねぇぇぇぇぇ！！」

と、その叫び声を聞いた黒子は、ジト目でカエル医師を見つめる

「随分元気そうなのですが・・・面会して、よろしいですか？」

すると、カエル医師はわざとらしくため息をついた

「仕方ないね・・・ま、明日には退院できると思うし
３０分なら許可しよう」

ありがとうございます、と頭を下げ、さっさと病室に入る

一人用の小奇麗な部屋の窓辺のベッドの上では
おっかなビックリ左腕を開いたり閉じたりしている女性がいた
と、女性は此方に気がついたようで、微笑みながら語りかけてきた
「こんにちは・・・いや、こんばんわ　かな？
ジャッジメントさん
さっきは危ないところをどうも・・・ま、一人でも勝てたけどね」
えへん、といった感じで胸を張る女性
どこかお姉様に似てるな、と思いながら本題に入ることにした
「そうですか・・・それで、お名前は？」
と、言い方がまずかったのか　あらかさまに不機嫌そうな顔をして
言い返してくる女性
「信じてねーな？
いや、勝てたからね、絶対！！
ちょっと初めての能力で焦ってただけで、良く考えればほぼ無敵
だし！」
本当に、お姉さまに似てる・・・主に負けを認めないところとか
・・・・・ちょっと待てよ？
今、初めての能力と言わなかったか？

「あなた・・・今、初めての能力と仰いましたね？
どういうことで・・・」

と、此処まで話すと、急に彼女が割り込んできた

「ところで、最近　御坂美琴に彼氏が出来たらしいな？
高校生だってよ
いや～超電磁砲も隅に置けないなぁ～★」

なん・・・だと

「な・・・どういう事ですの！
お姉様に、お姉様に彼氏などと！！！」

見事に話をそらされた黒子であった

2N　さっそく人体改造した変質者（後書き）

いろいろ不透明な点もありますが、それらは次回回収、ということで

に、してもプロローグ含めて3話まで主人公の名前が出て無いって・

・・

ちなみに主人公の名前は一方さんの別め・・・おや、こんな時間に

客か

３Ｎ　いろいろ判明した変質者

～３０分後～

「面会時間は終了です」

女医さんの声が聞こえる

いままで、原作知識をフル利用して上条×美琴を捏造すること３０分

長い戦いだった・・・

「グゥ・・・明日、退院なさったら風紀委員に出頭してください
よろしいですね！？」

と、拳を硬く握りながら立ち上がる黒子

なんかどっちかというと上条×美琴の話が聞きたいように見えなくも無いが・・・

そんなことはないさ、ウン。

と、黒子はテレポートするかと思いきや、普通に歩いて出て行った

なんだ？　ダイエットか・・・？

☆★☆★☆★@★☆★☆★☆★☆

ｓｉｄｅ　黒子

お姉様に彼氏

お姉様に男

ク・・・まさかツンデレ、いやビリデレ・・・むしろ普通の殿方に対しては

ビリビリなだけの友達のいないお姉様に（↑失礼）彼氏などと・・・

こうなれば、お姉様の露払いの名の下に

罪の無い民間人を・・・いえ、お姉様に巣食う男など　それだけで罪！！

ふ、ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あははははっふぇぇぇえふはふふはふははははあはあはあはあはあはははははh

（ry

お姉様、今行きますことよー！！

side　out

「ヘックシ！」

夏真っ盛りだというのに、くしゃみが出た　誰か噂でもしてるのかな？

ツンツン頭の少年が、そのようなことを考えていると

「見つけたわよ！！
今日こそ相手してもらうんだからね！！」

突然後ろから聞きたくなかった声が聞こえてきた

不幸だ・・・と思いながら振り返ると、そこには案の定手を此方にかざして
ビリビリ発電中の少女が立っていた

「少女・・・・・・ああ、俺の中の幻想がどんどん崩れていく
いや、コイツが特殊なだけか？」

と、自嘲気味につぶやく

それが気に入らなかったらしく、少女（仮）はゲームセンターのコインを取り出し

親指ではじくような体制になった

「ちょ！！　街中でソレはやめろ、ビリビリ！」

”ビリビリ”それは少女にとって禁句だったらしく、怒りに拍車を掛けただけであった

「ビリビリ言うな～～～～～～～～～！！！！」

少女の右手に、電流が流されてゆく

音速の3倍にもなるそのコインの弾丸は、その技は威力ゆえに彼女の名称にもなっていた

――――――――――――――――――――常盤台の”超電磁砲”

音速の3倍もの速さで飛ぶコインは、人間に当たれば唯では済まないだろう

それはこの少年、上条当麻にも言えることである

だが、この少年の右手にはある異能の力が宿っている

「ッッ・・・ぶねー・・・・」

少年の右手に、彼を破壊する”はずだった”コインが命中、下に落ちる

「あんた・・・なんで、無傷なのよ!!」

”異能”を破壊し、喰らい尽くす”異能”

「ハッ・・・なんていうか」

レベル0　幻想殺し(イマジンブレイカー)の少年は、今日も今日とて

「不幸だ・・・」

不幸なのであった

その日の夜のこと　常盤台中学の寮の一室にて

「クッ・・・昼間はお姉さまを発見することは出来ませんでしたわ
ですが・・・コレからが本番ですの
フフフ、この黒子、お姉さまに異常があれば一瞬で見抜く自信が
ございますのよ・・・？」

白井黒子は、同居人になにか不審な点がないか確かめるべく
いくつかチェックする項目を作成した

具体的に言うと

美琴が帰って来た時の

「ただい「お姉様～★」だ～！　抱きつくな！」

匂いチェック＆リアクションチェック

さらに　風呂に入っているときの

「ああ、この小ささが堪らｎ「揉！　む！　な！！」

スキンシップの反応チェック&手触りチェック

さらにさらに

「ああ、お姉さまの温もり・・・「下着を被るなあああ！！」

お姉さまの温もりチェック

さらにさら（ｒｙ

「ああ、お姉さま・・・なんて可愛らしい

このサラサラの髪の毛がなんとｍ「ベッドに潜り込むなァ！！」

いいかげんキレた美琴に電撃を喰らう

「お姉さまの愛の鞭・・・あぁん！」

だが、彼女にとってソレはご褒美でしかないので問題無い

さて、寝顔&髪質&電撃の質チェックも終えた

だが、どれも異常は見当たらない

あるとしたら、やたら機嫌が悪かったことだろうか？

どちらにしろ、今詰め寄るのは良くない

彼女の話が嘘だった可能性も否めないが、話を聞くに嘘を言っているようには見えなかった

いつか、決定的瞬間を押さえてやりますの！！・・・強く決心した
変体(黒子)だった

ｓｉｄｅ　病室

拳を握る

離す

握る

離す

振る、突く、回す

基本動作はだいたいこなせる様になった

そしてつい、独り言を漏らす

「ふふ・・・これさえあれば、あんな奴等には・・・」

と、そこまで言った所で、病室の入り口から声が聞こえた

「負けない、かい？」

そこには、当麻が原作で何回もお世話になっているカエル顔の医者が立っていた

冥土帰し《ヘヴンキャンセラー》　死んでいなければ何者でも治す

と言われ
また、その患者に必要なものがあればなんでもそろえる男だ
だが、さすがに彼も初めてだったのだろう
「たしかに重力のベクトルを操る君なら、ソレもたやすく操ってしまうだろうね
　でも、必要あったのかい？
　そのままでも十分じゃあないか　何故わざわざ１００？もある義手を？」
そう、彼女が所望したのは、腕一本分で重さ１００キロの特殊合金で作られた義手だった
「クハ・・・そうですね、俺が能力使いに慣れていない上に、能力使っても
　至近距離で格闘技の段位を持つようなやつに勝てる気がしなかっただけですよ」
本気で格闘技習おうかなぁ・・・と、言ってベッドに倒れこむ彼女
窓の外を眺めるその目は、どこか遠いところを見る目をしていた
「でも、君の能力にたしか、重力の大きさを変えるものがあったよね？
　それで相手の動きを抑制してしまえば・・・」
と、冥土帰しがここまで言うと、彼女は首を振った
「周りに影響させられるのは、半径２メートル以内

しかも、重力は手で触っているときと違って2倍までだ
たしかに、常人なら自分と同じ重さのものを背負えば動けなくなるだろうケド
そんなヤツならわざわざ動きを抑制しなくても素手で勝てる」
もちろん、能力つきだけどね、と付け加え、彼女は目を閉じた。
どうやら無理やり話を打ち切るつもりらしい
「・・・・・・まぁ、私の立ち入る領分ではないしね
好きにすればいいよ　君の体だ”重力操作”
・・・いや、鈴科百合子さん？」
それだけ言うと、冥土帰しは病室から立ち去った
と、同時にどこからとも無く声が聞こえてきた
『上出来だね、鈴科百合子さん（笑）』
「よぉし、オマエコロス」
青筋を浮かべながら、拳を握る様は病室とはあまりにも不釣合いだった
だが、そんなことを気にするはずも無く　起き上がり、胡坐をかく
「・・・てか、俺の能力そんなのだったんだな？
いきなり義手つけろって言われた時は驚いたけど」
『ああ、僕としてもこれ以上深入りはしないで眺めておくつもりだ

ったが
あまりにも情報を与えていなかったからね
分かりやすく言えば
全裸はイタズラ心、名前と女体化は君が一方通行が好きみたいだからね
恋が合理化するようにと思って（笑）』

コイツ、面白がってるな・・・

そう考えると、もういい加減文句を言う気力も無くなってきた

「てかさぁ・・・案外弱い能力なんだな？
これでレベル５か？」

百合子が言うと、声は大きくため息をついた

『きみは実に馬鹿だな？
重力を操れるということは、物の重さが関係ないということだ
たとえ５０ｔのトラックでも小指一本で投げ飛ばせる能力だよ？』

「・・・そう考えるとすげーのかもな」

まだまだ使い道はあるよ、と声は続ける

『２メートル以内なら、重力のベクトルを自由に操れるといったね？
つまり、自分の２メートル以内に入った相手の
重力のベクトルを上に向けてしまえば上に永遠と落ちていくことになるし
２メートル以内の小石や建物の全権は君にあると言っていいんだよ？

それに・・・っと、サービスはここまでだ
そのほかの使い方は君で探すんだな』

「・・・・・なんか有難う？
もういいや、寝るわ・・・お！！
発見！　手で寄せなくても布団が掛けられるよ！！
何コレ、便利！！」

コイツ、この能力なめて無いか？

普段抱くことの無い苛立ちを覚えた声は、そのまま消えていった

ＰＳ　不幸少年は逃げる際にサイフを落としました？

「不幸だ・・・・・・」

3N　いろいろ判明した変質者（後書き）

黒子が変態すぎて書き方がザルになった気がする・・・

黒子「言いがかりですの！！
　お姉さま、黒子は決して変体では・・・」

美琴「十分変体よッ！」／ビリビリ／

黒子「あああ・・・お姉様の体から発せられた電気が
　私の体を駆け巡って・・・あああ！」

だめだコイツ早く何とかしないと

４Ｎ　旗男とエンカウントする変質者（前書き）

今回はすこーし長め？

４Ｎ　旗男とエンカウントする変質者

「・・・何、コレ？」

「キャッシュカードと財布、あと地図だ」

「見れば分かるわ！　そんなもん！」

と、なんかよくわからんが、朝起きたらカードと地図、財布が置いてあった

財布の中身には、千円札が１０枚、１万円札が５枚ほど入っている

「これで支払えと？　足りなくない？・・・この地図は何？」

『順番に答えさせてもらおう

支払いはカードでしておけ、講座の金がそのままつかえる

ああ　ちなみに、君は知らないかもしれないが、学園都市はレベル別に

奨学金が変わってくるんだ　強能力者ともなれば、どこかの上条君みたいに

大喰らいを抱えても喘ぐ事はないくらいの金額が入ってくるよ

あと、通ってる学校によっても変わるみたいだな？

金額は明言されていないが、だいたいレベル５で君の高校なら

結構な金が入ると思うよ？」

「（何故途中から疑問系？）そうか

・・・・・・は？　高校！？」

急いで聞き返す

だが、ナニカの声はしれっと答えた

『高校、行くだろ？
ちなみにその地図の×印が寮だ
ま、飛べばすぐだろう　じゃあ、頑張れ』

と、それだけいうとナニカの声は消え去った

「・・・不幸だ」

彼女、もとい百合子は学校にいい思い出がない（死に場所的な意味で）
ので、できれば行きたくなかったのだ

と、百合子が　ｏｒｚ　していると、カエル医者がやってきた

「・・・なんだかよくわからないけど、元気そうだね？」

「元気は元気なんですけどねー・・・」

と、相変わらずｏｒｚ　状態で答える

「ま、診るまでもないね、退院おめでとう」

「・・・どうも
支払いはコレで」

と、とりあえずキャッシューカードを出すが、

それは受付にわたしてね、と言われてしまった

恥ずかしくて2倍ヘコむ百合子だった

★☆★☆@☆★☆★

「うーん、外はやっぱり気持ちがいいぜ！」

病院から出てすぐ、伸びをする

あの後朝ごはんをゴチになって、まったりしたので、今はＡＭ：１１時３０分

テンションはご飯のおかげで多少回復したようだ

「（・・・喉乾いた）」

と、朝っぱらからエネルギーを使ってしまったことを後悔しつつ病院近くにあった自動販売機の前まで来たのだが・・・

ヤシの実サイダー　売り切れ

黒豆サイダー　売り切れ

きなこ練乳　売り切れ

甘蕉茶　売り切れ

レインボートマトジュース　売り切れ
梅粥（ホット）　売ってる
いちごおでん（ホット）　売ってる
ガラナ青汁　売ってる

「・・・・・・・・・」

不幸だ

と、いわゆる　ｏｒｚ　となって心の中で叫ぶ百合子だった

「（なンだ　なンだよ　なンですかァ！！？
ほとんど売り切れじゃねーかァァァ！！！
しかも、お前・・・残ってるのホットと青汁だけじゃねーか！！
このクソ暑い（７月）にホットて！！！
つーか自販機に青汁て！！！
つーかお粥とおでんて！！！　飲み物じゃないだろこれぇぇぇ！！！）」

と、ひとしきり自販機に文句をつけたあと立ち直り、再び自販機と対峙する

「（まず、熱いのは却下
俺は前世では青汁もおいしく頂けたし、やっぱガラナ青汁・・・
いや、でも”いちごおでん”と並んでカオスといわれるコレに

手を出していいのか？
いや、でもまずおでんとお粥はありえないし・・・
我慢？　いやいやいやいや　絶対なんか飲みたい
今すぐに飲みたい！！　自販機を移る？　ねーよ！！）」

よし、と意を決して千円札を自販機に突っ込む

「・・・君に決めたッ！！」

ピッ・・・軽快な機械音がなる

百合子が選んだのは、青汁だった

・・・しかし

「（出てこない・・・だと？）」

まさか飲まれたか？

おつりのレバーを引く

出てこない

プツン、と彼女の中でナニカが切れた

「ク・・・ハ、ハハハハハハ！！！

おもしれえ、左腕の初仕事、手前にくれてやる」

と、そこまで言った百合子は、一歩後ろに下がり、左腕を握り締めてから言い放った

「いいぜ、自動販売機

手前が俺の千円を奪って無事でいられると思っているのなら・・・

まずは！！そのふざけた幻想をぶち殺――――」

と、そこまで言ったところで、通行人たちに奇異の目で見られている彼女に声をかける

勇気ある青年がいた

「あ、あの・・・なにかありましたか？」

百合子は、興を削がれた気分だったか、無視するのもアレなので答える

「ああ、この自販機に千円札を飲まれてね

腹が立ったからぶっ壊してしまおうと思って

どう、君も　今ならお粥とおでん、さらに青汁と売上金までついてくるぜ？」

と、青年のほうを振り返りながら、さりげなく共犯を持ちかけるが

「・・・あ、上条」

そこにいたのは、例のツンツン頭であった

だが、上条といえば、不思議そうな顔をしている

「あれ？　・・・面識、ありましたっけ」

こいつ、もし面識あったらすげー失礼なこと言ってるぞ

と、思いながら、よく考えたら自分と彼は面識がないことに気がついた

「（あ、面識無かったか・・・そうだ）

あ～、御坂に聞いたんだ

ほら、知ってるだろ？　ビリビリしてくる奴！」

と、今思いついたことを言うと、上条は納得したようだった

「ああ、ビリビリの知り合いか・・・って

アイツ、俺のことなんて言ってるんだ？」

「ああー・・・なんか自分の攻撃がきかね～って凹んでたぞ

まともに勝負してくれるまで、ずっと見かけるたびに攻撃するん

だとよ」

「・・・・・・・・・不幸だ」

ｏｒｚ　となる上条　ちょっとだけ同情したが、気にしないことにした

「あー、それで、この自販機はどうする？
壊す？
臨時収入入るよ？」

と、さらに共犯を持ちかけるが

「残念ですが上条さんは自動販売機の小銭に心を奪われて犯罪を犯すほど
落ちぶれてはいないのですよ・・・ってか、絶対つかまるだろ
というか、お前殴って壊す気か？」

と、そこまで彼が言うと、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた

「その通りですの
まったく、いつまでも来ないと思ったら、何をしようとしているんですの！？
一般の方まで巻き込んで！！」

「あ～・・・コイツ、例の男だよ？」

と、昨日話した　上条×美琴をにおわせる

と、黒子の目の色が豹変した

「なるほどぉ・・・この男がお姉さまを・・・」

ジリジリと上条まで間をつめていく黒子

並々ならぬ殺気を感じ取った上条は、背中を向けてダッシュで逃走した

その後ろを黒子がテレポートしながら追いかけるも
上条のすぐ近くは幻想殺しのせいでワープできないようだ

「不幸だぁ〜！！」

「（やだ、なにあの可愛い生物）」

この、一種の保護欲のようなものも、旗男である所以であろう

「（って、イカンイカン！
特にイベントも起こってねーのにフラグ立てられてたまるか！
そもそも俺は一通さん一筋だしィ
・・・・・家具でも買いに行こう）」

と、黒子がいなくなってまた目的もなくなったので
とりあえず寮とやらに向かうことにした

「（家具買ったはいいけど、寸法合わないとかマジ勘弁だしな）」

と、前世でのあるあるを思い出しつつ地図を確認
重力のベクトルを上に向け、空に飛び上がる

５０ｍほど上がったところで、下に同程度の重力をかけ、浮遊

「うーん・・・あっち？」

と、方向を見定め、重力のベクトルをそちらに向ける

と、落下している時特有の恐怖感が襲ってくる

「（ＫＯＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！！！

・・・・・・あ、逆方向にかければ遅くなるか）」

と、いうことで減速

ビルに激突しないように気をつけながら寮を探す

「（んーと・・・アレか？

結構ボロッちいな）」

と、そこにはごく普通のマンションが立っていた

学生寮としてはかなり豪勢な部類に入る気がしなくも無いが

周りの建物と比べるとやはりボロイ

とりあえず地上に降り、中に入る

「すいませーん・・・誰かいませんか～？」

と、とりあえず叫ぶ百合子

「どうかしまし・・・って、アンタさっきの！」

と、こちらを指差しながら叫ぶ青年
そこには、変体(黒子)と追いかけっこしていたはずの上条がいた
「よー上条クン？
大変だったね　逃げ切れたんだ？」
と、慰めの言葉をかけると、悲壮感あふれる顔になって言った
「そうなんだよ・・・なんとかここまで逃げてきたけど、いつ追いつかれるか・・・
お姉さま～お姉さま～って言いながら追いかけてくるアイツの不気味さといったら
・・・だいたい、上条さんは無能力者ですよ！？
そんな俺相手にテレポートしながら追いかけてくるとか・・・
上条さんの中のお嬢様像はもうズタズタですよ。」
と、いいかげん人間不信になりそうな上条だが
無能力者というところに百合子が反応した
「無能力者ァ？
大能力者、しかもジャッジメントに本気の追跡を受けて逃げ切り
超能力者の本気の一撃を受け流すアンタが無能力者！
ヘーソレハスゴイナァー・・・・・・で、本当はなんかあるんでしょ？
能力(チカラ)」
と、幻想殺しのことは知らないフリをして、詰め寄る百合子

だが上条は幻想殺しのことは知られたくないようで、話題をそらす

「と、ところでなんでここにいるんでせうか？」

「ああ、俺　ここに越してきたんだ

・・・・・・もしかして、ここアンタの学校の寮！？」

「そ、そうだけど？」

「（・・・マジか）」

ここは学生寮　つまり、同じ寮＝同じ高校。

「（つまり、俺は結構強制的に魔術に関わることになる・・・と）」

実際はおとなしく暮らしていればそんなことは無いのだが

せっかく転生してきたのにおとなしく暮らしてたまるか、みたいな考えなので

おそらく魔術にも関わってしまうだろう

「・・・よし、上条クン

今から俺の部屋を確認したいから、管理人さんの所に案内してくれるかな？

つーかしろ　強制だから！　逆らったらさっきのツインテのところにつれてくぞー★」

と、強引に上条の手を引く

「な、ちょ、え・・・不幸だー！！
つーかそっちじゃねえ！」

・・・なんだかんだ言いながら、案内はしてくれるようだ

★☆★☆@☆★☆★

「狭ッ」

「開口一番文句かよ！」

と、あの後とくに特徴の無いおじさん管理人に鍵を貰い、部屋に入った2人

位置関係は上条の部屋の2つ隣、土御門の部屋の隣、といった感じだ

部屋の中は、ごく普通のワンルームといった感じだ

「まぁ・・・一人暮らしにゃ十分か
クッソ安いし、文句は言えないな・・・よし、上条クン
メジャー的なものを持ってきてくれ
寸法測って、家具買いに行くから！」

上条、パシリ扱いである

と、お人よしの塊みたいな上条も、さすがに文句を言い出した

「って・・・俺はパシリか！　・・・ったく」

「（でも取りに行くんだ・・・）」

で、部屋の寸法を測り、暗記する

「（レベル５の頭脳パネエな）

よーし・・・さあ、上条クン！！

家具を売っているところを教えてくれたらうれしいぞ」

「へーへー。

わかりましたよ！

でも、いくら上条さんでも、ベッドとか抱えて移動とか無理だからな？

注文して、業者に持ってきてもらえよ」

「あいあいー」

と、言うことで外に出る２人

だが・・・

「歩くのメンドイ・・・タクシー呼ぼ」

「ええ！？」

金が手元にあると、使いたくなる

ガキの特性、うわなにをするやめｒ・・・

庶民の性が出た百合子だった。

４Ｎ　旗男とエンカウントする変質者（後書き）

お年玉貰った後、ほしくも無いものを買ったり、散財しまくったのはいい思い出

5N　説教された変質者（前書き）

なにこの茶番

はやく一方通行を出したい！

つーか無駄に長い！！

それもこれも説教モードの上条がいけないんだ！（言いがかり

と、いうわけで読んでくれると作者が歓喜します

5N　説教された変質者

「なんの冗談だ、これ・・・」

百合子は、家具屋（ニト●）に来ていた

で、金が足りないとかシャレになんねーよと考えたので

残高を確認したのだが・・・

残高

3，500，000，000，000

「（・・・・・小国の国家予算？）」

とにかく、金の憂いは無くなったということで、とっとと買うことにした

「まずはー・・・ベッドは早急に必要なんだよ

無理だったら上条クンのお部屋に泊めてもらうしかなくなるし」

「なんでそうなるんでせう？」

と、くだらない話をしながら物色

ベッドとクローゼット、絨毯とテーブルを買い、今日中に送ってもらえるようにした

ｓｉｄｅ　上条

「よしよし・・・次は服だよねー
　ずっと白衣ってのもどうかと思うし」

と、彼女はまたもや急に服屋行きを決定したようだ

彼女の格好は、パジャマの上に白衣、といったもので
確かに外を歩くようなものではなかった

その格好は、なにか研究員のようにも見える

「そうか？
下のパジャマはどうにかしたほうがいいかもしれねーけど
白衣は結構似合ってるぞ？
　お前美人だし」

と、これは本音だ　青ピたちに言わせれば
『女性と会話するとき本音は厳禁』

だ、そうなのだが　言葉に建前を含ませての関係なんて面白くない
だろうし
無視している

と、彼女は白衣をつかんでヒラヒラとさせながら否定した

「・・・これ、病院に借りてるもんだからだめなんだよ
俺、ちょいとドジってスキルアウトにボコられてよ、入院してた

んだ
　死ぬかと思った」
『スキルアウトにボコられた』
・・・なんだって？　自分で、顔が歪んだ事がわかる
それほど衝撃的な話だ
目の前の人間は、無能力武装集団であるスキルアウトに暴行され
それでもこんなにも明るく振舞っているというのか？
それも、こんな女の子が、だ
確かに、自分もスキルアウトに女性が襲われているのを助けたこと
は何度かある
だが、この子のように襲われ、病院行きになることだってあるのだ
「どうかしたか？」
上条の顔を、百合子は覗き込む
その顔には、一遍の陰りも無い　ただ、ただ今生きることを楽しん
でいる顔である
と、彼女は俺の顔から何かを察したのか、横に並んで話し出した
「・・・まあ、さ
　確かに怖かったし、痛かったけど・・・

それでも後悔はしてないよ？」

と、言いながら百合子は左手にしていたグローブを外す

すると、そこには精巧に作られた金属製の義手の姿があった

「――――――――ッ！！」

上条は絶句した

何も、言えなかった

何を言っていいかもわからなかった

「クカカッ、同情はしてくれるな

こっちも接しにくいよ

むしろ、殴ったときの殺傷力あがったしィ～？

ラッキー、って感じだよ」

「お前、は・・・」

自然と、口が動いた

「ん？」

「お前は・・・それで、いいのかよ」

彼女は、怪訝な顔をしながら、グローブを手に戻している

「お前は・・・自分が怪我したって・・・関係無いって！

左手が無くなっても、いいのかよ！」

必死で問いかける

だが、彼女はひょうひょうとした笑顔で、あっさり答えた

「・・・べつに、いいけど？」

「ざっけんな！」

力の限り叫ぶと、彼女はビクッと肩を震わせた

周りの通行人たちも、こちらを見ている

だが、そんなことは関係無い

「お前は、お前の守りたいもんを守るためなら

自分はどんなに傷ついたっていいのかよ！？

ふざけんな！！

お前に助けられた人だって、お前が傷つくことなんか望んでねえ！

お前が傷つくことで、悲しむ人だっているだろ！！

何でそいつらのことも考えられねえ！

そんな腕がなくなったことを仕方なかったみたいな風に考えるんじゃねえ！

自己犠牲なんか、誰も望んでなんか――――」

自分の思いを叫びとしてぶつける

相手に考え直してもらうために

この少女に、自分を大切にしてもらうために
だが、その思いは次の言葉で打ち消された
「いねえよ」
「――――！？」
「・・・俺が傷ついて悲しむやつなんか、いねえ」
何を、言っているんだ？
悲しむ人など、いくらでもいるはず
たとえ友人がいなかったとしても兄弟、親が悲しむだろう
自分だって、小さなころのことはあまり覚えていないが
親は、自分のいじめを無くさせる為にこの学園都市に自分を送り込んだのだ
だが、少女は、先程の明るい様子など微塵も見て取れない顔で言い放った
「わかってねーようだから教えてやる
俺には　友人、肉親、親、兄弟！
なーんもありゃしねーんだ
俺が傷ついたって、誰も悲しみはしねーんだ
『自分が襲われたことでコイツが傷ついた』って自責の念に
苦しむ奴はいるかもしんねーがよ
ソイツは俺が傷ついたことに悲しんでるわけじゃあねーんだ

それはわかるだろ？
・・・俺は目の前で傷つけられる奴を放っておける人間だ
だがな、自分の中の　コイツは助けてやりてえ
って思いを殺せるほど出来た人間でもねーんだよ
・・・・・・・・・俺は、俺の思ったように生きる　それだけだ」

「・・・・・・・」

何も、言えなかった

いや、この哀れな少女に何かを自分が言っていいのかもわからなかった

「・・・同情は、すんなよ」

それだけ言うと、少女は元の笑顔に戻り、俺の手をとった

「そいじゃ・・・服屋、いこーぜ」

★☆★☆@☆★☆★

ｓｉｄｅ　百合子

あ・・・ありのまま、今起こったことを話すぜ

『なんか面白そうだから、その場で思いついたことを言っていったら
俺が誰かの助けに入って左手が吹き飛んだと誤解された
しかも親兄弟や友人がいないことを、転生のせいなのに曲解された』

な・・・何を言ってるのか　わからねーと思うが
俺もなにが起こったのかわからなかった・・・
これ以上悪乗りしたら、なにかひどいことになる気しかしねえ。
「・・・ごめんな」
と、突如上条が口を開いた
なにが・・・と聞き返す間もなく、話続ける上条
「でもさ
これからお前が傷ついたら
俺が悲しいから
・・・俺が言えた義理じゃねえけど、もう友達だって思ってるから
――だから、もう無理はするな」」
言い終えると、上条は俺の手を引き、抱き寄せた
「ちょ、てめ・・・何して！」
なんだ、このラブコメ！　そりゃドキドキしないこともｎ・・・う
わあああああ！
落ち着け、落ち着くんだ、落ち着いての３段活用ォォ！（↑錯乱状態
こ、こういうときは素数を数えるんだ！！
１、３、５、７、１１、１７

と、突如俺の体・・・おもに左腕が重くなった

・・・あ！！　幻想殺しか！！！

「うお！？」

上条も、あわてて俺が倒れるのを阻止しようとするが、後の祭り

傾いた姿勢は直らず、俺はそのまま上条に押し倒される形となって

倒れた

「・・・・・・なにしてるんや？かみやん」

と、俺があまりの事態にボーゼンとしていると、俺の後ろから突如

低い男の声が聞こえた

男の姿を確認すると、上条は声を上げた

「あ・・・青ピ、と土御門！」

そこには、あのデルタフォースの2人が立っていた

・・・・・・ピクピク、といった擬音つきで

「まったく、朝から連絡つかないと思ったら、そういうことだった

のかにゃー」

「・・・僕らとの約束ほったらかして、なんや

自分だけ美人さんと、アツアツのデートか」

二人の周りに、未元物質が漂う・・・いや、恐らくは俺の目の錯覚だろうが

どうやら上条にも見えはしているようだ

「い、いやー・・・2人とも、なに勘違いしてるんでせう？
だ、だいたい上条さんがそんな良フラグ立てるわけ・・・」

「どっちにしろ、約束ほったらかして女の子と抱き合ってた事実は変わらないぜい」

上条が立ち上り、必死で弁解するもあっさりと切り捨てられる

「しかも、本当に違うんやったら、かみやん
自分が一方的に押し倒しとるっちゅうふうに見えるで？」

と、青ピに止めを刺される

このままここにいると俺も面倒くさいことに・・・

「い、いや！
約束についてはメール入れて、た・・・（確認中）・・・・・・。
」

送れてなかったようです

「で・・・そこの麗しいお嬢さん？」

と、突如土御門に声をかけられる

「は、はい？」

「かみやんとは・・・どういった関係で？」

どうやら、俺と上条との関係を知ってから処刑をするらしい

「ええと・・・私、新しく上条さんたちの寮に引っ越した者で
学園都市の外から来たものですから
その、家具とかを買うついでに町の案内をしてもらってて・・・
その」

雰囲気が！　土御門、雰囲気が怖い！！　一人称も私になっちゃったし

「つまり、あれかにゃー？
これは偶然なってしまったと」

「は、はい」

さっきから肯定しか出来ない（、・ω・、）

「つまりあれやね」

「ああ」

と、土御門と青ピは互いに頷き合う

すると上条は「わかってくれたか！」みたいな顔になる

だが、そんな上条の幻想は次の一言で打ち砕かれる

「「余計に救いようがない（わ！）（にゃー！！）」」

「ふ、不幸ｄ　ガフッ！！」

二人の怒りの鉄拳が上条の顔面にめり込んだ

★☆★☆@☆★☆★

と、所変わって広場のベンチにて

「で、うちの寮に来たってことは、うちの高校に転入するってことかにゃー？」

土御門が百合子に問いかける

「そう、なるな」

と、その一方で上条が殴られた部分をさすりながらブツブツと文句を言っている

「上条さんはスルーですか・・・いてて」

「自業自得だし、しかたないやん」

「ラッキースケベで済んだからいいものの、軽く通報物だにゃー」

「ふ、不幸だ」

「（仲良いなコイツら）」

と、そこで上条が「あ！」と声を上げた

「・・・ところで、お前　名前は？」

「「知らんのかい！！」」

ビシィ！　と思い切り突っ込む２人

・・・それにしてもこいつら、ノリノリだな　と、思いつつ名乗ることにした

「あ～・・・百合子だ
鈴科　百合子　好きな風に呼んでくれ
詳しい自己紹介は学校でするから深くは突っ込むな」

「ふ～ん・・・じゃ、ユリちゃんでどうや？」

と、青ピが提案した。

『いきなりあだ名！？』という俺の突込みをよそに、残り２人も賛同する

「いいんじゃないか？　あだ名は互いの距離を縮めるとも言うし」

「縮めてナニする気だ、かみやん・・・ま、いいと思うぜい」

・・・神様、俺は原作キャラと仲良くなるように仕向けられているのでしょうか？

いや、だって上条ならともかくそこ2名、さっき初対面だろうが！

「・・・了解
じゃ、俺は適当に・・・かみやん、青ピ、土御門と呼ばせて貰おう」

と思いつつ了承

好きに呼べって言っちゃったし

と、俺が言い終わると同時に青ピが反応した

「お！　なんやぁ、自分けっこうノリノリやな！
・・・普段ツンツンしていて他人を寄せ付けないようで、付き合ってみると実は
ノリがよくて、さらに時折見せるか弱い姿・・・イイ！」

そうだ、ここに病院を建てよう

・・・なんのためかって？　　ハハ、そりゃお前・・・

「手前の治療のためだ、青ピィィィ！！」

「ガフッ！」

左手の初仕事は、なんと一般人の腹を貫くことだったとさ

P．S

青ピは１０メートルほど吹き飛んだが、脊髄等に損傷は見られず、奇跡的に無傷だった

青ピ「不幸や・・・」

上条&土御門「「自業自得だ（ろ）（にゃ～）」」

百合子「・・・なんかすまん」

５Ｎ　説教された変質者（後書き）

どうも、しょうゆさしです

このクソ長い駄文を呼んでくださり、ありがとうございます

この作品は、『複線』なるものに憧れた作者が最初の方の話に無駄に複線を

ぶち込んだものです　つーか、ぶっちゃけアレ複線じゃなくね？

みたいなのもあります

で、最近『茶番が多いだろＪＫ』と友人から駄目だしを喰らい

さらに友人Ｂからは『グダグダ日常書きたいなら２ｃｈでやれ」と言われて

恐ろしくテンションが下がっています　ｏｒｚ

悪魔めぇ・・・それでも、一理あるとも思いました

は、はやく・・・はやく一方通行を出すんだァァァ！！！

もしくは超電磁砲とか、黒子とか、お花畑とか！

もしくはステイルか神裂、インなんとかさんを出せばァ！！！

6N　一方通行を見かけた変質者

あらすじ～

アクセロリ・・・一方通行大好きな青年は、ある日、ひょんなことから死亡してしまった！

そして、死後、『ナニカ』の意志に従い、別世界・・・とあるの世界に飛ぶことになった青年。

だが、気が付くと体が女になってたり、左手が重金属になってたりでさあ大変！

彼、もとい彼女は　この世界でどう生きてゆくのか――――！？

波乱万丈奇奇怪怪　奇想天外吃驚仰天！　この瞬間(トキ)歯車は動き出す・・・

百合子「なんだこれ」

青ピ「さあ・・・なんやろね？」

土御門「たぶん、しばらく話を作ってなかったんで、脳内で情報整理したかったんだぜい」

一同「なるほど！！」

・・・・・始まり始まり！

☆★☆@☆★☆★

百合子「まさか、一方通行？」

一方「・・・あァ？」

どうしてこうなった　…いや、うれしいんだけどね？

事は、約1時間前までさかのぼる・・・

・

・

・

青ピ「いや～　強烈やわ～
そんなところもカワイイけどな！
ユリちゃん、なんかの能力者？」

まだ言うか、このヤロウ！

能力は・・・いうと面倒くさいかもしれんな　よし、言わない

ちなみに、この間コンマ５秒　レベル５の頭脳すげ（ｒｙ

百合子「いや、無能力者だよ
　だいたいお前らの学校なんて、いい能力あったらいかねーよ！
　ああ・・・せめてレベル３あればな～　もっと上を狙えたのに・・・」

と、俺が例のごとくアドリブでセリフをまくし立てると、土御門が笑った

土御門「ははは、能力なんてあってもなくても変わらんぜよ
　大事なのはここ！　元気に暮らしてれば、そのうちいいことあるにゃー！」

そりゃお前は魔術使えなくなったしな

上条「そうそう、だいたい無能力者がなんですか！
　上条さんは元気に毎日暮らしてますよー！ってんだ」

百合子「お前さぁ・・・御坂の前で『俺は無能力者（キリッ）』とかいってたりしねーよな？」

いや、言ってるのは知ってるけど
なんかさっき説教されたのが腹立つのでお返しですよ

上条「え・・・言ってるけど？」

百合子「君は実に馬鹿だな！　そもそもレベル5なんて連中はほとんど
ゴテゴテとプライドを塗り固めたような奴らだぜ？
そんな連中の攻撃を１００％受け流しながら『無能力者（キリッ）』
なんて言って
どうなるよ？　侮辱以外の何者でも無いぜ？」
と、なにか思うことがあったようで「うっ・・・」と肩をすくめる上条
その一方で話についていけていない2人は互いに小突きあったりしていた
おいやめろ、１８０センチ台の男共がじゃれるな、暑苦しい！
百合子「ま・・・あの娘のことだから気にはしてねーだろ
永遠と勝負を挑まれるかもしれないけどな」
ニシシッ、と笑いながら言ってやると、さらに肩を落として「不幸だ・・・」
といって黙り込んでしまった
百合子「・・・まぁ、いつまでも町ん中ブラブラしててもしゃーねーし
どっか行って、青ピの金で遊ぼうぜ！」
青ピが「ちょ、それはないんちゃう！？
僕もあんまし金は無いんよ！？」　とか言ってるが
他2人は大いに賛成のようなので、遊ぶことにする。

え？俺金あるだろって？

わかってないな、他人の金で遊ぶのが楽しいんだろ？

土御門「んじゃ、ゲーセンでもいきますか」

百合子「ゲーセン！！！」

マジか！！　あの３Ｄのゲームとかがあるという・・・すげえ、楽しみ！

・・・と、あまりにもオーバーリアクションな俺を見てあらぬ心配をした上条が尋ねてきた

上条「あれ、嫌か？　なら他にも行く場所は――

百合子「ぜんっぜん嫌じゃねーよ！　ほら、いくぞ！　ほら、ほらァァ！！！」

上条「お、おう・・・」

★☆★☆@☆★☆★

百合子「・・・・・・・・・・」

・・・絶句。

俺ら一行はゲーセンに到着したんだよ、うん。

・・・・・・あえて言おう

百合子「すげえ・・・」

上条「ん？　なんだ、お前もしかしてゲーセン来たこと無い？」

百合子「え、ああ・・・まぁ、な

・　・・ンだァ？　エスコートでもしてくれんのかよ？」

と、エスコートという言葉を出した瞬間青ピが「僕がエスコートしたろか？」

とこちらに手を差し出してからんでくる

・・・うん、うざい★

だが、ゲーセンの使い方・・・なんて無いだろうが、元の世界と違うところがあったら

困るし、仕方ないので、本当に仕方ないので！！無言で差し出された手をとる

青ピ「それじゃ、まずは正装に着替えよかー♪」

と、言われるがままについていくと、なんかいっぱい衣装がかかった部屋につれてこられた。

青ピ「ユリちゃんは～・・・こんなん似合うんとちゃう？」

と、差し出されたのは、なんか無駄に露出度の高い衣装である

ああ、そういうことか・・・

百合子「あァァァお髪クンよォォォォ・・・さっきのじゃ、まだまだぬるかったかァ？
　　やっぱ全治3年くらいの怪我ァしねェとなァ、このクソヤロウがァァァ！！」

殺す！！　殺す！！！　コイツ殺す！

青ピ「ちょ、冗談、冗談やって！！」

百合子「初めてだと思ってこんなもん着せようとしやがって・・・
そんなに
　　女の子とキャッキャしてぇのか？　あァ！！？」

と、キレてテンションがおかしなことになっている百合子を見て
上条が多少引きつつ止めに入る

上条「い、いや・・・青ピも悪気があったわけじゃあ・・・」

百合子「尚悪いだろうがァ！！」

上条「ヒッ」

と、土御門はいつのまにかいなくなっているのだが、誰も気づかない

百合子「あはははは！！　あァ楽しい！！」

青ピ「ぎゃあああああああ！！　やめて！！　やめったてなぁああ！！」

★☆★☆@☆★☆★

百合子「あははは！　よく似合ってるぜ！」

青ピ「殺してー　殺せー」

上条「これは・・・」

土御門「・・・」

青ピは、体を極限まで縮め、イヤイヤ言っている。

上条はドン引き、土御門は無言で写メっている。

つまりどういうことかというとだね・・・・・・

青ピ「なんで僕が修道服着なアカンのん！？」

俺に修道服を着せられたのだ・・・ん？

ああ、そうだよ、あの銀髪大喰らいの着てるのとおんなじ様な奴ね

百合子「んじゃ、遊ぼうぜー！」

青ピ「・・・マジで？」

上条「おい、関西弁どうした」

土御門「ま、あきらめて・・・ププッ　遊ぶんだぜ、い・・・ク、アッハッハッハ！！」

青ピ「不幸やーーー！！！」

★☆★☆@☆★☆★

百合子「あ～・・・楽しかった！！！」

ゲームもだけど、吹っ切れたのかあの格好でダンスゲームをプレイしてる青ピも見ものだった。

プププッ！

上条「じゃあ・・・次はどうする？

　そろそろ昼だし、なんか食うか？」

ふむ・・・例の給食レストランとか、行ってみたいかもしれんな

でも・・・面倒くさい　さっきまでゲーセンに居たせいでクソ暑いし

そうだ、家に帰ろう

百合子「ねー、暑いしさ、寮でさ、遊ばね？」

上条「句読点多っ！？」

百合子「うっせー　あついし、おなかへったんだもん」

だめだ・・・漢字で考えれなく、なってきやがった

土御門「はは、まあ最近真夏日が続いてるし、仕方ないかもしれないぜい

ほれ、俺たち以外ほとんど人が居ないだろ」

周りを見ると、土御門が言うように、人はほとんどおらず、ちらほら不良や

警備員を見かけるくらいだ

つーか、地面近くに蜃気楼ができてる

百合子「・・・蜃気楼を防ぐ地面とかはできんのかね？
　　なんで科学の町のくせにここはストレートにコンクリなんだよ！」

青ピ「せやけど、やっぱし『地面』やからなぁ、そんなにお金かけるわけにも
　　いかんのとちゃう？」

百合子「そうかなー・・・」

こんな日でもあの人（アクセラレータ）は反射で暑くないんだろうな・・・

とか、いろいろ考えていると、いつの間にか例のぼろい寮についていた

エレベーターに乗り込むと、４人も乗ったためか、ワイヤーがきしむ音が聞こえた

百合子「・・・大丈夫なのか？　これ」

上条「まぁ・・・多分」

科学の町で『エレベーターのワイヤー切れて落ちましたｗｗ　あうあうｗｗ』とか
洒落にならんぞ、おい

百合子「大体・・・クーラーも付いてねーのか？　このエレベーター
　　どこの古めかしい館のもんだよ、おい」

上条「古めかしい館にエレベーターは付いてないと思うのでせうが・

・・」

突っ込むまないで、恥ずかしい・・・っと、付いたようで、ガタン！と

大きなゆれとともに音を立てて扉が開いた

・・・本当に大丈夫なのか！？　このエレベーター！！？

★☆★☆@☆★☆★

上条「食らえ！」

メタ●イト「うりゃりゃりゃりゃ！」ドシュドシュ

百合子「ちょ、おま！」

カー●ィ「ドシュドシュ」

青ピ「隙ありや！」

リザー●ン「ドゴァ！」バキィッ

上条「うわっ！」

メタ●イト「グゥッ」ヒュ〜

土御門「ほらよ」

ネ●「ＰＫファイヤー！」ボァ！

上条「こ、この展開は・・・」

メタ●イト「グハッ」

百合子「お返しィ！！」

カー●ィ「ふおおっ！」ハンマー

メタナ●イト「うぁあああぁぁぁ……」キラーン

上条「ふ、不幸だ・・・」

百合子「そりゃ、団体戦で1人に向けて必殺技なんて使ったらね・・・」

青ピ「隙多すぎやで」

土御門「ただでさえ不幸体質で攻撃受けやすいのににゃー」

と、俺たちは今、上条の部屋にいろいろ持ち込んで（ゲーム機とか）スマブラをしている

ん？　ゲームばっかじゃんって？

ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ　いまどきの若者はそんなもんよ（↑

百合子「・・・なんか食べたいね」

土御門「というより昼飯食ってないにゃー」

百合子「いや、だからなにか菓子でも・・・」

上条「ふ、不健康だ・・・」

コイツは何を不幸だ・・・みたいなトーンで言ってやがる

ま、いいか　せっかくだし、なんか買ってきてあげよう

百合子「じゃ、せっかくだしコンビニでも行ってくるわ。
　　ついでにおにぎりとか弁当も適当に選んでくる」
そう言って立ち上がると、上条が俺を引き止めた
百合子「何？」
上条「俺のは５００円以内で、よろしく」
と、言って俺に５００円玉を掲示して見せた
百合子「（おごろうと思ったんだけど・・・）あいあい　了解～」
土御門「俺もそれで頼むぜい」
青ピ「僕もー！」
と、２人が５００円玉を投げてきたので、せっかくだから能力で勢いを弱めてキャッチ。
ううむ、やっぱ飛び道具を止めるには威力が足りないか・・・
百合子「・・・んじゃ、行って来るー」
☆★☆@☆★☆★
～コンビニ～

中に入ると、クーラーの冷たい風が顔に当たり、すがすがしい気分になる

と、ほぼ同時に元気のよい女性店員の「いらっしゃいませー！」という声が聞こえた

店内を見渡すが、客は誰一人としていない。

こんな状態の中、間髪居れずに挨拶ができた彼女はなかなか模範的な店員といえるだろう

俺はまず、お菓子のコーナーに行き、スナック菓子や飴の袋を無造作にかごに放り込む

そして次は、弁当。　３人に５００円を預かりはしたが、せっかくなので奢やろう

と、そんなことを考えて弁当売り場に向かう

そこは夏らしく、冷やし中華やざるそば、それから名古屋名物のきしめんが置いてある

『店長のイチオシ！』の大きな札が目に入ったので、きしめんをかごに入れる

が、先ほど無造作に菓子を入れたため、すぐ入れられず

心の中で少し後悔しつつ、かごを整理して、きしめんを入れる

と、そのとき『ピロロロロ！』と軽快な音が聞こえた

誰か来た様だ　さっきの店員さんも元気よく挨拶を、しようとした……

「いらっしゃいま――――！！」

店員さんの声は、そこで途切れてしまった

やくざ風の男でも来たのだろうか？

そう思って入り口のほうを覗くと、そこには白髪を輝かせ

ギラギラとした赤い瞳の

『あの』青年がいた

百合子「――――ま、」

予期せぬ出会いに、百合子はつい、言葉を漏らした

百合子「まさか、一方通行？」

一方「・・・あァ？」

続く

7N　メルアドをゲットした変質者（前書き）

相変わらず、1人称（百合子視点）と3人称入り乱れる拙さ。
じ、次回からちゃんと書くんだからね！
だから見放さないでー！

つーか百合子が一方通行の前でキャラ変わりすぎやで・・・

7N　メルアドをゲットした変質者

あらすじ

青ピが踊った

スマブラやった

一方通行と出会った

百合子「なんだ、この適当な説明は！」

★☆★☆@☆★☆★

一方「なンだァ？　お前・・・」

百合子「え～・・・」

っべえ！！！　やっべえええええ！！！

ついうっかり！　声かけてしまったぁああ！

えーと、えーと・・・どうするどうするどうするどうす（ｒｙ

一方「さては、てめェもこの俺を倒そうとかいうクチかァ？
・・・ハッ、無知ってのは怖いねェ」
と、邪悪な笑みを浮かべて構えを取る一方通行
ちょ、なんでそんな乗り気なんすか！？
いつもは相手に殴らせて戦闘不能になった奴をあぼーんしてませんでしたか！？
百合子「い、いや・・・そういうわけでは無くてですねー」
どーしよ　どーしよ　どーし（ｒｙ
・・・・・・そうだ
百合子「・・・ところで、コーヒーお好きですか？」
一方「・・・あァ？」
一方通行は、拍子抜けしたのか構えを解き、こちらをジト目で見つめてくる
一方通行たんハァハァ・・・じゃなくて！！
百合子「ええとですね、第1位サマはコーヒーがお好きと聞きまして、私も好きなので

お話出来たらなー、なんて・・・」

・・・嘘は、ついてねーぞ

実際、一方さんがコーヒー好きということで、俺もコーヒーについて勉強しまくって

毎月いい豆とその解説を送ってくれるデリバリーとも契約しちゃってた俺ですよ

・・・それで小遣い全部消えてるけどな

ゆえに、禁書は基本学校の図書館で読んでいる

ちなみに5巻はずっと占領してた　カッコイー！　惚れちゃいそうだぜ一方通（ｒｙ

あ、あと8巻　冒頭の絵・・・あれ反則だよな

一方「・・・・・・ハッ、ンで俺が」

と、プイとそっぽを向いてドリンクコーナーに向かう一方さん

それに俺も付いてゆき、ひたすら語りかける

百合子「ア、一方通行さんはどの銘柄がお好きですか？」

一方「・・・・・・・・・・・・・ブラックで、銘柄は特に決まったのはねェ」

そうでしたー！！！！　そういやこの人飽きっぽくてすぐ銘柄変えるんだっけ・・・

百合子「ブ、ブラックでしたら『ブラジル』を使ったのがおいしいと思いますよ！」

これは、俺の感想なのでなんとも言えないが、他のに比べてうまかった気が・・・

一方「そりゃだめだ　苦味が軽すぎンだよ」

Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！

つーか案外詳しいな、オイ！

一方「やっぱブルーマウンテンか、マンデリンだろォが
　　それとも、高い豆は買えませンってかァ？」

・・・・・・く

百合子「（喰いついたッ！！）そ、そうですねー、高いのは体質的に合わなくて」

一方「はン、そういうのを貧乏性っつーンだよ」

百合子「ははは・・・で、何買おうとしてたんですか？」

と、聞くと無言で『ＢＯＲＺ』というコーヒーを指差した

おい、ボスのパクリ多すぎるだろうが

百合子「・・・それ、おいしい？」

一方「まァ、コンビニにしては上出来だな」

と、それだけ言うと一方通行は１２本ほど（つーか全部）かごの中にコーヒーを放り込んだ

百合子「・・・・・・」

実際見ると少し引かなくも無いが・・・

と、ジト目で彼を見ていたのだが、

一方「お前ェも大して変わり無いだろォが」

と、突っ込まれた　俺のかごには、チュッパチ●ップスがドッサリ入っている

所謂、全部だ。

・・・だ、だっておいしそうなんですもの！！

いつかお金が入ったらやろうと思ってたんですもの！！

こっち来てから病院食しか食って無いんですもの！！！

・・・と、俺が黙り込んだのを見て、ため息をつくとさっさとレジに向かう彼

・・・・・ ハッ！ の、逃すか！！

と、彼の肩に手を伸ばすが、反射されて触ることもできない

こ、こうなったら・・・アレしか無い！ （↑テンションがおかしなことになっています）

何、重力を制御できる俺なら、簡単なはずだ・・・重力の方向を、彼のほうに

そして・・・触れる瞬間・・・！！！

重力を、逆にッ！！

―――――――――――――――――――――トンッ

と、小さな音を立てて、彼の背中に触れることが出来た・・・いや、触れたわけでは無いけど

すると彼は、歩いているときに背中を押され

それも一応重力をかけた一撃なわけで、前に倒れかけて、2，3歩よろめいた

あ・・あっるぇ～　なんか、フラg　一方「・・・・・・はァ？」

彼は、目を見開きこちらを見据えて言った

一方「おいおい・・・どうなってんだよ」

一方「く、はは・・・おもしれェよ、お前！
　愉快に素敵に決まっちまったぞォ」

こ、怖えええええええ！！！！

百合子「ま、まぁ落ち着いて！」

一方「さァて、どーすっかなァ」

と、彼はニヤニヤと邪悪な笑みを浮かべながら

一方「じゃあ・・・殺されたく無けりゃ、どうして俺に触れられたか、説明しろ」

と、どうやら此処でドンパチする気は無いようである（一触即発だ

が）

百合子「え、えとですね　今のは、木原神拳と呼ばれるものの流用でして」

一方「木原だァ？」

と、木原の名を出したことであらかさまに機嫌の悪くなる一方通行

この言い方やめとけばよかったかな、と思いつつ続ける

百合子「は、はい　彼の編み出した対一方通行用の武術で
反射膜に触れた瞬間に手を引き戻すことでその
『引き戻した』エネルギー、つまり
離れていくベクトルの力を、反射、自分のほうへ向けてしまう
というアナタの能力を逆手に取った方法でして・・・」

焦りすぎておかしな身振り手振りを加えながら話す彼女に

彼はワケがわからないといった風に返した

一方「は・・・ンだ、そりゃ　そンなこと可能なのか？
ちょっとでもズレれば、腕が吹っ飛ぶだろォが」

百合子「まぁ、確かに・・・私の場合は、偶然成功しただけですし、
木原数多の場合はアナタのことを研究しまくっているわけですし
成功率は１００％。

反射のベクトルをどの方向に向けても分析されちゃいますし
反射切ったら切ったでボッコボコにされると思――」

と、そこまで言ったところで、彼は鋭い眼光をさらに鋭くして叫んだ

一方「あァ！！？」

百合子「サーセンッしたぁ！！！」

間髪入れずに頭を思い切り下げる

つーか、怖いよこの人！　でもそこがいい！

と、俺がMに目覚めるか目覚めないかくらいのところで
一方通行が見当違いなことを言い出した

一方「つーかお前・・・その格好、研究員か何かか？
　木原の野郎とも知り合いみてーだし
・・・すると、何かァ？
俺をまたあのクソみてぇな場所で弄り回す気かァ？
まさかいまさらレベル６への進化は無理でした、なンて言うんじゃねェだろォな？」

Ｏｈ．．．まさか、この格好が裏目に出るとは

でも、なんか優位に・・・は立てなくても同等に会話できるように持っていけそうだ

百合子「いや・・・そういうわけじゃ無いから安心してくれ

俺がお前に声をかけたのは、マジで語り合いたかったってのが1番だ
・・・そうだ、携帯もってっか？」
一方「・・・あァ」
百合子「寄越せ」
一方「はァ！？　何で・・・」
百合子「いーから！！」
と、ごり押しすると、舌打ちしつつも形態を取り出す一方通行
うん、最初から強気に出ればよかったよ。
そしてそれを引ったくり、カチカチと操作をする
百合子「（おし・・・覚えたぞ　アドレス）」
そう、この俺　鈴科ちゃんは携帯アドレスを記憶していたのだ
レベル5の頭脳パネエ、と改めて実感しながら、携帯を閉じ、彼に返す
一方「・・・何しやがった」
百合子「いや、何も♪」
チッ、と彼はまた苦々しい表情となり、レジに向かい精算、外へと

出た。

百合子「・・・さて、俺も帰りますかね」

と、とりあえず他にもマンガとか弁当を物色、日照りがすごいことになってるので
日焼け止めも買っておいた。

百合子「あっづぇぁ・・・・・・」

なにこれ、クソ暑いんですけど

あー、暑い暑い暑いあつ（ｒｙ

せっかくの純白の肌も焼け付いてしまうな、こりゃ。

というわけで日焼け止めさん登場です。

百合子「・・・っつっても白衣だし
首と顔くらいしか塗るとこねーけどさ」

と、独り言を言いながら、日焼け止めを塗りたくり、出発

能力を鍛えるため、重力のベクトルと強さを調節して歩かず平行移動する

と、突如横道から人が現れたが、気を抜いていたため演算が間に合わず
ぶつかってしまった。

百合子「あ・・・すいません」

ペコリ、と頭を下げ　再び進む

が、しかし　ぶつかった相手が悪かったようで、突っかかってきた

不良Ａ「おい、ちょっと待てや」

百合子「・・・なんでしょうか？」

百合子は、心底面倒くさいといった風に振り返り、不良と向き合う

不良Ａ「姉ちゃん、ぶつかっといて詫びもなしか？　あ？」

百合子「・・・だから、謝ったんですけど」

不良Ａ「はぁ？　手前、調子こくなよ？」

・・・プチン、彼女の中で何かが切れた

もとより、暑いのが嫌いだし、早く帰りたいし、トラウマ的な意味で不良は好かないのだ

・・・そしてなにより、彼女は沸点がとても低い。

百合子「テメエが、だろォが」

不良Ａ「あぁ！？」

百合子「あァン！？」

バキィ！！

重力のベクトルを拳の進行方向に向け思い切り殴り飛ばす

全体重を乗せたその拳は、不良の頬を捉え、数十メートル吹き飛ばした

百合子「（・・・当麻もそうだが、この世界　拳になんか補正でも付いてるのか？）」

と、さすがに飛びすぎて怖くなってきたが、そんな暇も無く周りの取り巻きB，Cも騒ぎ立てる

不良B「手前！　やってくれたな！」

不良C「ぶっ殺してやる！」

だが百合子は、そんな二人を尻目に、スタスタと歩き出した

一人殴ったらスッキリしたのである

不良B「おい、コラ！　なに無視してん――――」

と、不良の一人が彼女の肩に手をかけた

が、その瞬間不良は宙を舞い、転んでしまった

不良B「・・・なっ、能力者か！？」

百合子「（女があんだけ人をぶっ飛ばした時点で気づけよ・・・
　　にしても、範囲内に入った奴は自由に転ばせられるのか
　便利だな）」

と、彼女はもう勝負は終わったとばかりに能力を使って飛び上がる

不良B「空力使いかっ！！　くそ、喰らえ！」

と、転んだほうの不良が手から1メートルほどの火球を飛ばしてきた

百合子「うおおおおお！？」

続く

7N　メルアドをゲットした変質者（後書き）

終わり方ぇ・・・

8N　補導された変質者

あらすじ

一方通行と会って話した

からまれた

百合子「不幸だー（棒）」

～～～～～～～～～～～～～～

百合子は、突然の攻撃に驚きつつも、なんとか火球を避ける

不良B「ハハハ、驚いたか！　俺は発火能力のレベル3だ！」

不良は高笑いしながら言い放つ

百合子「・・・ったくよォ・・・一方通行のメルアドゲットして機嫌が良かったから

見逃してやってたってのによォ・・・つーか、治安悪すぎだろォ

俺が不幸なンかァ？・・・・・・よし、決めた」

百合子は、ブツブツと2，3言つぶやくと地上に降り、手袋を脱ぎ、ポケットに突っ込む

百合子「左腕（これ）の真の初仕事・・・テメエにくれてやる」

ヒュンッ――――！

空気を切り裂き、横の車を殴り飛ばした

車は、数メートル吹き飛び、そこで爆発を起こした

百合子「んっふっふっふっふ・・・クフフフフ、アハハハハ！！！」

悪魔のような笑みを浮かべ、重力のベクトルを操り、高速で不良へと接近する

不良B「な・・・く、クソッ！！」

一瞬、なにかおぞましい物を感じた不良は怯みかけるが
そこはレベル3、すぐさま火球を飛ばす

百合子「あはははははは！！！」

百合子は、左腕を突き出す

触れたものをすべて炎で包み鉄をも溶かす高熱の火球が彼女の腕に
激突、燃え上がる

百合子「悪ィが！！！」

と、その瞬間炎が一気に飛散、傷ひとつ無いの彼女の姿があった
そして変わらぬ笑みを浮かべながら、

百合子「こっから先は一方通行だ！！　進入は禁止ってなァ！！

おとなしく尻尾巻きつつ泣いて無様にもとの居場所へ引き返しやがれェ！！」

風を裂き、不良に接近　右拳で顔面を捉えると、これまた面白いように吹き飛んだ

・・・そして、いつのまにやら集まっていた野次馬（主に子供）の群れの中に墜落した

百合子「・・・・・・」

・・・ヤバイ

冷静さを取り戻し、本能的に何かヤバイ事を察知した百合子は空を飛んで逃げ出そうとするも

??「ジャッジメントですの！」

と、しゃがれたような女性の声に引き止められる

百合子「・・・うわーお」

黒子「器物破損、殺人未遂で拘束しま・・・えっ」

百合子「ドウモ、シライサン　コノアイダハオセワニナリマシタ
　　イマハ、ヨウジガアルノデ、オハナシデキマセン　デハ」

黒子「行かせるとでもお思いになって？
　それに、聴取するから支部に来なさいと言ったはずですが？
　とりあえず――――

と、そこまで言った瞬間、黒子の姿が消えた
そして、直後目の前に現れた
黒子「拘束します」
ガシリ、と百合子の手をひっつかむ黒子
だが、しばらくして当惑したような顔になる
黒子「・・・あなた　レベル５と聞きましたが
　能力阻害の力でも持っているんですの？
　往生際の悪い！」
・・・・・・Ｗｈａｔ？
なにその幻想殺し
百合子「いや、別に俺は何も・・・」
わけがわからない、といった感じで返すが
黒子「そんなはずは・・・やはり、演算は間違えていませんわ
　貴女とは、一度じっくりお話する必要がありそうですわね」
と　睨み付ける
こういった雰囲気が嫌いな彼女は少しふざけて
百合子「美琴の話とか？」

黒子「違いますの！・・・いや、それもですけど、違います！！
とにかく、能力の制限を解きなさい！」

百合子「知らないってば！！」

いや、本当に何を言っているんだ、コイツは？

俺の能力は（よく知らないし、原理もわからんが）重力を操るものだ

それで何故能力が阻害される？

空気にも働く重力だが、もしかしてＡＩＭ拡散力場も引き付けてたりするのか？

と、考えた百合子は、能力の使用を１度打ち切ってみる　すると―

―――

フワリ、一瞬　不思議な浮遊感があったと思うと、２人はある建物の中に転移していた

黒子「・・・やっと観念しましたわね」

てこずらせやがってこの野郎と百合子を睨み付ける黒子

百合子「いや、知らんというのに・・・」

だが、と百合子は考えをめぐらせる

百合子「（事実、俺が能力を打ち切ったらテレポートは成功した

やっぱし能力の弊害かなんかか？）」

と、色々考えるが　その間にも時間は動く

黒子「ほら、ボサッと突っ立ってないで、早く付いて来なさい！
　またテレポートしますわよ？　・・・って、また使えませんし」

百合子「警告から1秒と経たずに能力を行使すんじゃねーよ
　・・・いや、俺も人のこと言えねーか」

まあ、いいですわ　と百合子の手を引く黒子

いくつか機械的な作業を済ませ、部屋に入るとそこには頭に花をつけた少女と
お茶菓子を食べる女の子
眼鏡をかけた女性がいた

佐天「あ、お邪魔してまー・・・あれ、誰ですか？」

と、佐天が不思議そうに尋ねる

普通、犯人（容疑者）がこんなとこにはこないものな、と考えつつ
　挨拶をする

百合子「どうもー」

黒子「初春、いいかげん一般の方を入れるのは・・・まあ、いいですわ
　この方は――

と、ここで彼女の悪い癖（スキル）が発動する

百合子「黒子ちゃんの彼女ですっ♪」

と言いながら黒子と手を組み、自分に引き寄せる百合子

ビキリッ――――――場の雰囲気が凍りついた

そして、彼女はまたほんの少しだけ後悔した

黒子「あ　あな、あな、あなたは・・・」

初春「これは・・・ニュースですっ！
　皆さんに連絡をしなければ！！」

黒子「初春！！」

ブン、と百合子の手を振りほどいて叫ぶ黒子

佐天「彼女・・・って、まさか白井さん・・・」

黒子「違います、違いますからね！？」

固法「・・・前から変体だと思っていたけど、やっぱり変体だったのね」

黒子「違いますから！」

と、そろそろ可哀想になってきたのでネタばらしをすることにして

話そうとするのだが・・・

瞬間、ビリビリと体の芯まで揺らすような、大きな爆発音がが響いた

百合子「（爆弾？）」

黒子「っ！　まったく、次から次へと！
　いいですこと、決して逃げないでくださいね！！」

と、乱暴に言い切ると、どこかにテレポートする黒子

百合子「事件、かね？
　皆さんは行かなくていいの？」

と、尋ねると

初春「私は、コレ専門ですから」

と、パソコンを指差す

固法「私は・・・まぁ、白井さんがいれば大丈夫でしょう
　空間移動があれば、私の能力なんか無くて平気だろうし」

と、無責任なことを言う

佐天は、風紀委員でないことを知ってはいるが、なんとなく尋ねてみる

百合子「あなたは？　行かないの？」

佐天「え、私ですか？　私は、風紀委員じゃないから・・・」

と、どこか寂しげに答える

百合子「でも、何かできることがあるかもよ？
今の、よくわかんないけど爆弾でしょ？
近くの建物の中の人とか、人質にとられてるかもよ？」

と、そこまで言うと、

初春「すいません！　えーっと・・・白井さんの彼女さん、佐天さんに変なこと
吹き込まないでください！！」

と、オーバーリアクションで怒鳴る

百合子「あはは、ゴメンゴメン！
あと、俺は百合子って言うんだ
鈴科（すずしな）　百合子（ゆりこ）　よろしくね・・・あと、彼女って嘘だから」

と、ネタばらしをすると皆一様に「なーんだ」という顔をした

初春「ちょっと安心です！　白井さん、まだ遠い所には行ってなかったんですね！」

百合子「どれだけ信用が無いの？　あの子は・・・」

初春「ところで・・・なにか、研究のお仕事でも？」

と、尋ねられて自分が白衣＋パジャマであることを思い出す

訂正しようかとも考えたが面倒くさいので事実を歪曲して

百合子「そだよ　俺も能力者だし」

初春「へ～・・・あれ？　バンクに乗ってませんよ？」

もう調べたのかよ、と内心冷や汗をかきながら

百合子「いや、最近こっちに引っ越してきたんだ
俺が原石とかなんとかで、独自に能力の研究をしてたんだけど
その成果と原石の珍しさもあいまって学園都市（コッチ）に来たんだ」

と、例のごとく瞬間的に考えた嘘八百で貫き通す

初春「へ～・・・強度はいくつなんですか？」

百合子「いくつだと思う？」

初春「うーん・・・2、とかですかね？」

固法「いえ、自分の能力を研究して、学園都市に招かれるくらいなんだから
3以上はあるでしょう？
・・・いや、もしくは原石なんて、唯でさえ珍しいんだから
強度が低くても・・・」

と、固法さんが案外ノリノリなのに驚きつつ、答えを言う

百合子「正解は、超能力者(レベル5)です」

・・・・・・・・・間、間、間　　誰も、一言も発しない

百合子「（あるぇ～・・・）」

と、あるタイミングで初春がやや興奮気味に叫んだ

初春「す、すごいですよ！！！　レベル5なんて！！
　学園都市に7人しかいないんですよ！？」

百合子「これで8人な？」

初春「すごいです！　ねぇ、佐天さ・・・佐天さん？
　どこですかー？」

百合子「・・・？　トイレかな？」

固法「ちなみに、ムサシノ牛乳はどんなに飲んでもお腹は下さないのよ？」

百合子「いや、知らんがな」

☆★☆@☆★☆★★☆★☆@☆★☆★★☆★☆@☆★☆★

時はすこし遡る

昼下がり――――と、言うにはすこし時の経ちすぎた街中

学生の町の日曜というものは、普段もっと活気のあるものだが

３８度近くにもなる超真夏日には、誰も出歩かない

出歩いているのは、精力溢れる小中学生のみで、高校生はダウンしている

そしてそんな中、全身黒ずくめの異様な集団が現れた

まるで軍隊のように統率の取れた歩きで進む集団

僅かな通行人の目に、それはどのように映っただろうか？

と、ある位置で集団は崩れだした

一人、また一人と行軍から離脱　ビルになにやら機械のようなものを取り付ける

そして、１０個ほどの機械を１つのビルにそれを取り付けると、また１つの集団となる

そして、集団のうちの一人――他のものと違い、ヘルメットでなく

兜をつけた者――が
ボタンを押した
と、瞬間　腹の底まで響くような　巨大な爆発音が響き渡る
そして、何者かの襲撃に備えるように　迎撃の体制を取る
ヒュッ　瞬間、突如何もない空間に　1人の少女が現れた
黒子「ジャッジメントですの！　おとなしく――ッ！」
なんなんだ、こいつ等
謎の集団を前にして、一瞬だが黒子の動きが止まる
そしてその瞬間、集団の一人が白井に発砲する
黒子「チッ！」
ヒュン、空間移動でそれを避け　太もものケースに刺している鉄槍を引き抜く
黒子「手加減は・・・無用のようですわね！」
いきなり相手の体の中に鉄槍を転移
その強靭な肉体、鎧も　周りの物を押し出して転移するテレポート
相手には無力である
そして、集団の一人が倒れると、まるでマニュアルの通りに動くが

ように、皆

３６０度（上も含め）隙のない陣形にすぐさま変更

銃を無差別に乱射する

黒子「っ！（ひとまず距離をとるしか！）」

周りはビル　窓ガラスが砕け散り、弾が乱反射する。

中には集団の中に突っ込むものもあったが、鎧によって弾かれてしまう。

黒子「武器を下さって、どうも！」

飛び散ったガラス片に触れ、集団の人間に向けて転移

だが、その隙に銃弾が何発か、黒子の柔らかい肉に食い込む

集団といえば数人が倒れ、残った５．６人は陣形を崩し、辺りを縦横無尽に駆け回りだす

その予想の出来ない動きに乱され、攻撃が出来ない

黒子「・・・っ！」

体から血が流れてゆく

こんなことなら応急薬でも持っておくのでしたわね、と舌打ちをし

一旦空間移動で撤退しようとする、が

黒子「（能力が、使えない！？）」

続く

次回予告

突如、支部から居なくなった佐天さん

どこへ行ったのか捜索しているうちに、黒子は謎の集団との戦いで負傷

能力を使えなくなってしまった

そんな中、颯爽と現れるのは――――ッ

次回～９Ｎ　ガチバトルする変質者

（次回の内容は作者の都合で変更されることが多々あります）

９Ｎ　助けに入った変質者（前書き）

予告と違うのは、ご愛嬌ということで・・・

それから、白井さんが好きな人はブラウザバック推奨かもしれません

9N　助けに入った変質者

前回のあらすじ

百合子「テロだーテロだー！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

血管のように、大量の管がつながれた、試験管のような器具
その中にあった『人間』は、何かを悟ったかのように薄く笑みを浮かべた

すると、どこからか響くような音が聞こえて来る

『・・・アレが動いたぞ』

どこからか響くその『音』は、不愉快で、おぞましく。
それだけで逃げ出したい衝動に駆られるものだった
だが、科学サイドの頂点　学園都市の統括理事長であるアレイスターは
その音を軽々聞き流す

アレイスター「ふむ・・・　お前の送りつけたようなモノだ
また面倒なことになるのだろうな」

そして、その音に負けず劣らず、不愉快な、男か女か分からない『声』が発せられる

それを聞き、音はまるで笑っているかのように

『言うな　貴様の手駒の中に、いくつか優秀な人間が行っただろうが』

アレイスター「・・・確かに、能力的には優秀だ
６，０００，０００，０００の人間を漁ったところで、あれほどの者はそうそういない」

『ならば』

と、そこまで音が響いた所で、アレイスターは目を鋭くさせ

アレイスター「だが、どれもこれも人格が不安定だ
力の使い方を分かっていなかったり、本質を理解せず、弱いまま眠らせたり
自己の力に溺れ、暴走したり・・・
事実、お前がこの学園都市にもたらしたものは
利益よりも、損失のほうが大きい」

そこで、一息間を空けると人間は尋ねた

アレイスター「貴様の目的は・・・何だ？」

その問いに、音は全てを見透かしたように響く

『アレイスター・・・所詮、貴様も人の子
俺の行動に、理由(もくてき)など求める内は、俺の行動の理由(わけ)等理解できんよ』

★☆★☆@☆★☆★

黒子「ぐっ！」

まずい

このままでは、確実に殺される

黒子は、なんとかしてその場を逃げ出そうとしていた

と、彼女が能力を使用できないことに気がついたのか、男達の1人―兜の男―が前に出る

「・・・大能力者ともあろうお方が、軽率じゃないのかな？
痛みで使用できなくなるようなデリケートな能力なのに、1人で来るなんてよ。」

黒子「ふん・・・それは、貴方の方ですわ」

「何？」

黒子「此処にはもうすぐ、常盤台の電撃姫・御坂美琴がいらっしゃる予定なんですの
　　早く逃げたほうがよろしいんじゃなくて？」

「ああ・・・そりゃ好都合だ」

チッ、内心黒子は舌打ちをした

もともと、超電磁砲《御坂美琴》が来る予定は一切無い

このようなことはしたくなかったが、レベル５の威光で追い払おうとしたのだ

犯罪者を逃がすことになるし、次は死者も出るかも知れない

今、考えれば愚の骨頂であるが、そんな判断も出来ないほどに彼女は傷ついていた

傷口からはドクドクと血が流れ出る

彼女の細い身体が、筋肉が、脳が、悲鳴を上げる

「何だぁ？　死にそうじゃん
　可哀想に・・・」

と、そこまで言うと兜の男は腰から刀を引き抜いた

「楽にしてやるよ」

と、言うと男はその場で刀を振りぬいた

黒子「（何を・・・っ！）」

バッ、なにかいやなものを感じた黒子は、即座に身体を横に転がす

と、その瞬間道が刀の軌道上で抉り取られ、突風が生まれる

そして、それが黒子のいままで居た場所を抉り取る

それを見て男は満足そうに笑った

「フヒッ・・・やっぱ最高だわ、この力」

そして、再び刀を振りかぶる

「ほら、避けないと死ぬぜぇ？
　ま、楽に死にたいってなら別だけどぉ」

ビュン！

再び、地面を抉りながら突風が黒子へ向かう

黒子「こんなのっ・・・！」

と、それをまたギリギリで避ける

が　転がった先にいつの間にか移動していた男に蹴り飛ばされ、ノーバウンドで吹き飛び、

黒子「ハッ・・・アッ！」

ビルに叩きつけられ　肺から、空気が搾り出されたような音が発せられる

ドサッ、と地面に落下し、ピクリとも動かなくなる黒子

「おぉい、まだ壊れるなよ？
・・・ま、壊れちゃっても次ぃ行くだけなんだけどね」

ニタァ、と男は引き裂けるような笑みを浮かべた。

★☆★☆@☆★☆★

佐天「・・・」

この少女、佐天涙子はあまりの出来事に、動くことが出来ないでいた

元々、百合子の言葉に触発されて、人質などがもし居た場合
先導しようと出てきたまでのことだったのだが、事態はそれほど甘
くなかった

大能力者、学園都市にも限られた人数しか居ない、超エリートであり
絶対に揺るがないほどの実力を持っている、憧れるような存在
それこそ彼女の中では御坂美琴と同位置に置かれている彼女が
今にも殺されようとしていたのだから

佐天「は、早く・・・警備員に」

ポケットから携帯電話を取り出すが、あまりに慌てていたため
地面に取りこぼしてしまう

佐天「あ・・・」

佐天は、急いで身を隠す

「・・・んー、誰か居るねぇ　気配は感じてたけどさ」

男が、此方を振り向いて言った・・・ように感じた

「じゃあ、ちょうどジャッジメントさんもお寝んねしちゃったしぃ
お前で遊ぶとするか、佐天涙子さんよ」

佐天「ひっ」

相手は、此方を見ている　そして、自分の名前を知っている

相手から、こっちは見えないはずなのに

こっちからも、相手は見えないはずなのに。

自分の隠れているビルなど、まるで無いかのように感じる

「そいじゃ、やるか」

背筋が凍るような、冷たい言葉

慈悲のかけらも無い　人を人とも思わない
命を命とも思わない、例えるならば小さな子供がアリを踏み潰すような
興味本位で身体をいじくりまわし、殺してしまったときのような
悪意も無い　何も、無い
ただ、ただ純粋な殺意だけがこもったそれは、佐天を貫くように響いた
そして次の瞬間、大きな爆発音が響いた
佐天「――――――」
心臓が、止まりそうになった　が、いつになっても自分に衝撃は来ない
すると、不愉快そうなあの男の声が聞こえた
「お前・・・何？」
「何？ってお前・・・・・・そうだなぁ」
そして、男の声に　場に似つかわしくないほど飄々とした声で返す
甲高いそれは
彼女にも聞き覚えのあるものだった

百合子「・・・俺は、お前を倒す者だ！」

9N　助けに入った変質者（後書き）

慣れないことはするべきじゃないな、ほんと

自分的には今後の伏線も含めてるんですが・・・

なんだろう、この不安感

９．５Ｎ　助けに入った変質者　百合子視点（前書き）

物語の進行が０という悲劇

もっと書けよって？　すいませんでした　ｏｒｚ

9.5N　助けに入った変質者　百合子視点

前回のあらすじ

百合子「白井パンダさんが怪我をした」

黒子「だれがパンダだ、ですの！」

～～～～～～～～～～～～～～

時は少し遡る～

百合子「これはまた・・・面倒くさいな」

どうも、鈴科百合子です

す・ず・し・な　ゆ・り・こ　ですよ～

決して鈴鹿（すずか）じゃないですよー　どこのサーキットだ、俺は。

それはともかく　今、居なくなった佐天さんを探しているんですが・・・

居ないんだよね、うん

つーか、さっきから銃声がパンパンパンパンパンパン聞こえるのですが

黒子大丈夫かよ？

弾幕張られて平気な能力だっけか？　テレポートって

盾とかもろくに持たずに出てったし・・・

避けるにも限界があんだろ？

・・・・・・あ、銃声止んだ

え、倒した？　・・・いや、無いな、常識的に考えて

えっ死んだ？　黒子死んだ！？

・・・ま、今は死んでいないにしてもヤバイな

銃撃を無くして平気＝能力を封じられた可能性が高い。

まぁ、あの娘が死んでも別に困りはしないが（死なせたくないけども）

・・・つーか、死なないだろ

原作でも全然だし、うん。

とある科学の超電磁砲とか、大活躍じゃん。

『ところがどっこい』

百合子「・・・・・・なんなの、お前は」

あー、あれか？　ストーカーか？

新手の嫌がらせか？

『いや・・・お前に業務連絡だ』

なんだよ業務って　しらねーよそんなの

俺、働いてねーよ　つーかなんなんだよ連絡ってよ！

『・・・白井黒子は、このままだと死ぬ。
　それだけだ』

あっそ

Ｗｈａｔ？

百合子「おい、今なんて――――」

と、声を出した瞬間、炸裂音が聞こえた

・・・身の危険しか感じないんだけどね、逃げていいのかな？

『ヘタレ？』

うるさい、黙れ。　能力の使い方もろくにわかんないのに！

そもそも能力で戦って彼女に勝てたらレベル５な。

とか　かまちーの中で基準になってる白黒パンダに勝利した奴に

どう勝てって言うんだよ！！　馬鹿かお前！！

『いや、お前レベル５だろ？』

うっさい！　勝てるかボケ！

御坂美琴とか呼ぶにしても、電話番号もしらねーし、無理だっつの！

第一俺携帯持ってねーし！

『恥ずかしくは無いのか？』

あぁ？

『・・・お前は、それでいいのか？』

いいも何も無いだろ　俺が逃げるって言ってるんだよ

『本当か？』

・・・勿論だ

『なら、別にかまわん
負けるくらいなら逃げろ
触らぬ神に祟りなし
人間にはこのパターンに該当する言葉があるだろう？
自分の力を理解して、適切に対処する　頭のいいことだ』

・・・・・・・・・・おい

『何だ』

黒子の相手は、どんな奴だ？

『肉体強化系の能力者で、レベル４程度の能力だ
貴様と同じような境遇で、転生してきて数ヶ月になる』

・・・十分だ

『どうする気だ？』

・・・・・・別に？

あとさ

『何だ？』

百合子「そいつってよ・・・・・・殺しても、いいんだよな？」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

百合子は、少しだけ後悔していた

あまりにも簡単に煽りに乗ってしまったことを

基本、彼女は馬鹿だ

頭の良し悪しでなく、馬鹿なのだ

前世ではクラスに変体と認識されていたし
親友にもよく『ちょっと病院行って来い』とか
『ここは特殊患者の隔離病棟じゃねーよ』とか言われていたのだ

ちなみに、その親友の少年は彼（彼女）の葬式に出席していなかったり
それなりの訳があったりするのだが、それはまた別のお話。

百合子「（さぁて・・・あれ、どうしようね）」

・・・状況を説明すると

彼女が犯人と思われる人物を発見、ビルの陰から見ているが

犯人の挙動が明らかにおかしいのだ

百合子「（あれ、アイツ気づいてないか？）」

犯人は、百合子の熱烈な視線を受けるが、実は気づいていない

むしろ至近距離でガタガタしている佐天を気にかけていたりする

カタン、携帯を落としそれが地面に落ちることで発生した音が　真夏の空に響く

そして、佐天は目をつけられた

百合子「（げっ！　佐天さんじゃねーか！！）」

「んー、誰か居るねぇ　気配は感じてたけど」

百合子「（佐天さんが危ねえ！　どうしようどうしよう！！）」

百合子は半分錯乱しつつ、なにか武器（主に車）がないか

あたりをキョロキョロと見渡す

「じゃあ、ちょうどジャッジメントさんもお寝んねしちゃったしぃ

　お前で遊ぶとするか、佐天涙子さんよ」

百合子「（ッ！）」

やばい、そう思ったとき　彼女は気づいた

武器なら、ここにあると

百合子「（・・・仕方ないよね、うん）」

彼女は、すぐに演算を開始

左腕近辺以外の重力を調節、ベクトルをビルに向け、手のひらをつける

百合子「（・・・１０倍、２０倍、３０倍）」

と、彼女の思うように　次々重力が大きくなってゆく

だが、それに比例して彼女にかかるはずの負担は、なぜか通常と変わっていない

メキメキと音を立て、コンクリートがへこんでゆく

百合子「（アレは、俺の触っているもの以外なら2倍、と言った！
ならよ・・・・・・）」

百合子「触ってるモン、それと体には自由にかけられるってことだよなぁ！？」

バコッ

鈍い音を立て、ついにビルに腕を通すことができた

百合子「そらよ！」

そして、ビルの重力のベクトルを操作、男のほうへ投げる

「・・・あ？」

ビルが男へ向かうが　男は上に飛び上がり、周りの建物を利用しそれを回避した

だが、男の仲間らは逃げ切れず、全員ビルの下敷きとなった

百合子「し、死んじゃった・・・？
　　ま、まあいいけどさ」

「お前・・・何？」

百合子「何？ってお前・・・・・・そうだなぁ」

ポリポリと頭を片腕でかき、腕を組んで考え込む

そして、なにか思いついたかのように満面の笑みを浮かべながら飛び散った窓ガラスの破片を踏み潰し、叫んだ

百合子「・・・俺は、お前を倒す者だ！」

9．5N　助けに入った変質者　百合子視点（後書き）

なんか百合子がぶっちゃけた回でしたね
サックリ人死んだし、ビル投げたし・・・
いや、一方通行も投げてたよね、ビル

１０Ｎ　覚醒した変質者（前書き）

前回の更新から３ヶ月……？

ハハッ！（某ねずみ風に）

……申し訳ございませんでした。

追記　ＰＶ５００００突破、だと！？　いやっほおおおおう！

あと、あれです　作者は黒子アンチじゃないよ！

むしろ大好きだよ！

打ち止めと同じくらいに！

１０N　覚醒した変質者

前回のあらすじ

百合子「黒子が撃たれたけどとくには気にしません」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「（あれ・・・滑った？）」

カチン、と全身を硬直させ　冷や汗を流すこと５秒

「ふーん・・・正義の味方ってヤツか」

男が反応した

「正義、か・・・違えな」

と、そこで区切り　自分の上方向へ地球のものより多少弱い程度の重力をかける

そして

「自己満足だよ、バーカ！」

地面を蹴り飛ばし　銃弾のような速さで男に迫る

「ははっ、面白え！！」

と、男はソレを迎え撃つ形で百合子に突っ込んでくる

「らァ！」

刀を抜き、百合子の首を刈ろうと横に凪ぐ

が、彼女はそれを左腕で受け止め、その腕をそのまま前に突き出す

「はっは！」

男はソレを伏せて避け、その体勢から無理やり足のバネを使い
彼女の身体にタックルをしようとする

「無茶苦茶すんじゃねぇ！」

と、それを大きく弧を書くように飛び跳ね、男の遥か後方２００メートルほどのところに着地する

その横には、トラックが駐車してあった

「ごめんなさい！！」

と、百合子は仕事道具を失ってしまった誰かに謝罪をしつつ、能力を使用し

トラックを男に投げつける

「下らな」

ズバン！！

男は、そのトラックを　刀を力任せに叩きつけることで、叩き割った

２つに割られたトラックが、彼の後ろで爆ぜ、科学の町に見合わないコンクリートでできた地面をえぐる

「ちっ・・・！」

百合子は、さらに追撃をかけるべく、近くに聳え立っていた風車を叩き折り
それで殴りかかる

「・・・どこをどうしたらアレが折れんだ？」

「ハッ、この風車の重力を１点に集中、強くしてやりゃ余裕だっつの！」

風車を振りかぶり、男に向けて、落ちる。

風車にかかる重力のベクトルを強化、前に向けて落ちていくソレは通常の人間なら目視がやっとである速度で男に迫る

直前でそれを放し、自らはそのまま前へ落ちる。

だが、風車はいとも簡単に避けられ、表通りに面する、おそらく有人であるビルに突っ込もうとする

あのままいけば、確実に崩壊する。

「ッッ！！」

タイミングよく、自分も前に向かっていたため、なんとか風車の前

へ立ちふさがれた
咄嗟に手で防ごうとするも、時間が足りず、風車でその体を突き抜かれてしまった
が、ある程度威力は殺せたようで、ビルに彼女をめり込ませる程度で済んだようだ
「何やってるんだ？」
被害を受けたビルから、警報が鳴り響き、次々住民が逃亡する
中には、ジャッジメントに連絡しようとして、男の仲間に撃たれる者もいた。
男といえば、その光景を、まるで喜劇でも見ているかのように眺めている
完全に遊ばれている。
確かに、能力の強弱でいえば、超能力者最弱（今のところ）である百合子だが
それでも確実に、大能力程度の肉体強化よりは、強い。
だが、それでも、勝てない。
この構図は、ある戦いを思い出させた
最強の超能力者と
最弱の無能力者の戦いである。

「じゃ、そろそろ殺すけど？」

スッ、と手を掲げると周囲から再び黒ずくめの男達が現れ、銃を構えた

百合子といえば、自身の現状最強の攻撃を受け、完全にダウンしてしまっている

「――だめっっ！！」

Ｓｉｄｅ　佐天さん

気づいたら、飛び出していた

怖かった　でも、もう嫌だった

白井さんみたいに、目の前で誰かが撃たれるのが、どうしても我慢できなかった。

「もう、やめてえっ！」

――Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ――

心からの、叫び

だが、彼女のそれは無残にも切り裂かれる

「退け……死にたいのか？」
付き合ってられない、とばかりに日本刀の切っ先を、少女へと向ける
「――ッ」
ぶわっ、と体中から汗が滲み出るのを感じた
このままでは死ぬ
逃げろ
体中が危険信号を発する
「いやだっ！」
それでも
「絶対に退くもんか！」
彼女は、退かない
たとえ自分が死んでしまったって
見過ごすなんてことが、できるはずがない！
「良く言いましたわ、佐天さん
　貴女は下がっていてくださいまし」
と、佐天さんが叫んだ直後、甲高い声がしたかと思うと男の日本刀

がポキリと折れた後、体中から鉄の矢が生えた
と、同時に周りの男が持っていた銃も爆発、足などから鉄の矢が生え、無力化される

「ここからさきは――
風紀委員（ジャッジメント）の仕事ですの」

重症の少女――いや、一般人を守る使命を背負った、1人の勇敢な戦士の姿がそこにあった

「ふうん……テレポート、か
奇襲とか、ひどいことするなー」

男は、そう言いながらゆらりと体を揺らすと、大きく叫んだ

「ハァッ！」

「！？」

鉄の矢が男の体から落ちてゆく
そしてさらに、その途方も無い筋繊維は、傷口をすべて塞ぎ、出欠すら許さない

「バケモノですわね」

「ほっとけ」

そして、音も無く戦いが始まった

元より白井は実践型の格闘技を習得している。

身体能力が高いだけの素人である男と一対一で戦ったのなら
基本、しばらくは接戦となる。

「はァ！」

男の体に黒子が触れ、その体を地面の中に転移する　が

「残念、無念、また今度！」

力ずくでコンクリートから這い出る

「……頭以外すべて埋まっていたはずですのに。
どうしたら出られるんですの？」

額に汗を浮かべながら、薄い笑みを浮かべる黒子

そもそもまだ、ダメージは抜け切っていないのだ

それを『一般人』の佐天涙子が危険であると踏んで、無理をして助けに来たのである。

だが、そんな黒子にニタニタと貼り付けたような笑みを浮かべて
男は、迫る。

「うーん、企業秘密」

律儀にも先の質問に答え

「じゃ、死ね」

自身が砕いたコンクリートの破片を、指先ではじいた

「――！」

軽い衝撃と、激痛が彼女の体を襲った

銃弾の如く飛んだコングリートは、彼女の体に惨くも突き刺さっている。

「ふたーつ、みーっつ」

気の抜けたような声で、次々と破片を打ち出す男

そして、そのたびに彼女の体には破片が突き刺さる

「いやっー！！？」

佐天が悲鳴を上げるが、男はまったくそれを意に介さない

「それじゃあ……チェックメイトだ」

次々に衝撃を受け、ついに地面に倒れこむ黒子

そして、その頭にむけて、狙いをつけた。

「死――――」

轟！！

その瞬間、背後のビル――百合子の埋まっていた――から、大きな爆発音が鳴り響き

地面が唸りを上げた。

Ｓｉｄｅ　百合子

血が流れ出ていく

鼓動が聞こえる　大きい。

体が、熱い

──血が、染み込んでいく

砕けた地面に……地球に、染み込んでいく

──あ、

Ｓｘａｏｗｑｐｏ：ｆｎｂｇｗｏｅｆｄｇｕｑｉｈｕｊｃａｖｙ１２ｒｖａｍ@ｏ１２ｈｎｅｃｕｊａｏ？

頭の中ｎａｐｏに、ｊａａｎｂｉａなａｎがれこんｎａで──

──Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ──

さて…ここで、少し話を逸らそう

そもそも彼女──百合子──の能力は

重力の大きさと、そのベクトルを操る能力である

つまり、重力子――グラビトン――を操ることにかけては
かの一方通行にも匹敵するのだ。

そもそも彼女は、この地球上にあるグラビトンを操っているのではない
十一次元的計算により、この地球に、三次元に影響を及ぼしているのだ
重さ、重力の大きさを二倍三倍というのは
三次元に『どこかから』グラビトンを、本来より少し多く引き出し
その量を増やしているに過ぎない。　この点は、垣根帝督と似ている。

分かりやすくいえば、この地球上のグラビトンを操るのに
彼女は一方通行と同じベクトルを操る演算を

重力を増幅するのに、白井黒子、空間移動能力者と同じ
十一次元的演算と、垣根帝督と同じ行動（力の引き出し）を行っているのである。

そもそもこの『どこか』にある重力子
その全体を操るなどというのは、人間の脳では不可能である
それこそ　一方通行（アクセラレータ）や未元物質（ダークマター）
等の、『天界』の力を振るう者で、やっと、半分が見えるといったところか

事実、彼女はそんな途方も無い力を振るっている自覚は無い。
ただ、触れたものであれば、よくグラビトンが理解でき、頭の中に自然と浮かぶ

演算式を解いていれば、もう能力は使えるのだから、そうだろう
重さも、２倍程度にしかできないところを見れば
自分の力を良く分かっていないのは明らかである

だが、それではいくら素質がレベル５相当と言っても、単純な力を
振るうだけでは
それに特化した大能力者に敵うはずもなかったのだ。

だが――
彼女は、今　三次元やら十一次元などの問題をすべて無視し

血の染み込んだ

自らの赤血球、白血球、血小板、血漿　、リンパ球の触れた

この星　『地球』　を理解するに及んだ

「ア、はあハッあはっｂｓｍｆｓｌｔ？」

口から自然と奇声が上がる。
だが、あまりの演算量の多さに、発声に回せる力がないのか、ノイ
ズが混じっている。

ぬらりと立ち上がり、上に手をかざした

刹那――この『地球』
岩盤、マントル、外核、内核にいたる地球のすべてが重さを持った

轟！！

地面がうなりを上げる

今この瞬間、全世界で同時に起こっているそれは、彼女の力を地球が恐れているかのようである。

彼女の腕の上には、ブラックホールとまではいかないが、光を吸収し周囲2センチほどの光を歪めている、強大な力がある。

それもそのはず　彼女は今、この地球の質量――地球全体にグラビトンをかけて
その重さ、6，000，000，000兆tもの力を、その1点に集め
さらに2倍にしていたのだから。
――だが、光を屈折させ、吸収するほどの力なのにもかかわらず
周りに被害は及ぼしていない
恐らく、彼女の影響下に置かれているのだろう

「フヒ」

口を歪め、指を　その光景を呆然と見ていた男へ向ける

ぐしゃり

抵抗する間も、声を上げる間もなく、男は地面に倒れ伏せた

「なっ…」

黒子が驚きのあまり、声を漏らした

超能力者の無茶苦茶加減は、いつもすぐそばで見ている

それでも、この光景は、驚きに値するものだった。

「ギャハハハハ！！」

百合子が両腕を広げると、今まで空中にあった力は消滅

そして直後、彼女の背中から、取って代わるように真っ黒な翼が噴出した

『う、後ろ……気付いてんのかよ、化け物！

――とでも言えばいいのかな』

そしてその直後、百合子の脳内に声が響いた　『ヤツ』だ

そして百合子は、そのナニカの声に答えるよう、言った

「――ｎｖｍａ上ａｄｗ等ォｐｗｉ」

その直後

男は黒翼によって上空１０００メートルまで突き上げられた後

その力を全て上に向けて放った攻撃を受け

グシャグシャになりながら音速の１０倍を超えた速度で吹き飛ばされた

学園都市の昼空に、流れ星が昇った。

続く

番外編其の壱　とある能力嫌悪《アンチスキル》の戦闘員

〜アンチスキル〜

教師によって構成された、学園都市の治安維持機関である。

だが、この街には

新たなアンチスキルが、作られていた

スキルアウトを束ね

強力な武器を使用する

別名『能力嫌悪』

そんな能力嫌悪の上層部が、揃って高位能力者であるというのは

なんとも皮肉な話である。

〜ある構成員の日記〜

1日目

今日は兄貴に連れられて、よくわからねえ組織とかに連れて行かれた。

仕事は簡単で、召集がかかった時に集まって、殺す。

それだけだそうだ

普段は何をするわけでもなく、ただグータラしてるだけで1日５０万だってよ
ただ、組織を表に出さないようにってことで暴れられないのが難点だな

アニキ曰く
『長期間召集するアテもないのにこんなことをするはずがない
近いうちに戦いがあるだろう』だってさ

心配しすぎだぜ

2日目

昨日と今日で１００万、いい商売だぜ。
この金で新型のケータイを買った。

月から自由落下しても壊れない、だそうだ

久しぶりに食い物以外のモンを買ったから、新鮮だ

3日目

召集だ

帰ったら続きを書こう

―3日目　携帯端末より―

（瓦礫の下、遺体に庇われるようにして発見）

もうだめだ　そろそろ痛みも無くなってきた

どうしてこんなことになったのだろうか

兜を被り日本刀を差した、よくわからん男に従っていたらこのざまだ

高位能力者ってのは、やっぱりバケモンだ

人間じゃねえ　人間は、あんな大きなビルを投げつけたりしない

人間は、あんな感情の無い目で　俺たちなんか目にも入れねえで

そんな簡単に人なんか殺せないんだ。

この携帯を見てくれている人、こんな俺がいまさら、と思うかもしれない

でも、お願いだ　こんなことは　許されないはずだ

住所は　第3学区　●●　の　××　そこに　組織に　ついての資料　が

―第3学区　●●　の　××―

「ったく、面倒くさい
だーから組織についての資料なんか作らなくていいって言ったの！　うだー！」

荷物の散乱した部屋の中、若い青年がそう叫んだ後
両手に抱えていた物を投げ捨て、地面へと腰を下ろした

「仕方ないでしょお、あんなに死者が出るなんて思わなかったんだもん
負けるとしたら、超電磁砲の介入が9割、黒子が倒しちゃうのが9分
その他不慮の事故が1分、ってトコだったんでショ？
ツリー、なんちゃらの計算で、そう出たって聞いたよぉ？」

と、男の独り言とも思える言葉に、甘ったるい声の女が

その横で机を漁りながら答えた
男は、そんな女に『バカかコイツ』みたいな目を向けながら
「樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）、な
それと、超電磁砲が介入して負けてても
多分この作業はやる羽目になっていただろうな」
「……なんでぇ？」
わけがわからない、といった風に答える女に
男はため息をつきながら
「だから、超電磁砲の電撃は『認識阻害』を妨害しちゃうから
周りの人間が気づいてすぐ通報するってんだよ！
それで家を捜索されてバレたら事だろうが！」
「……なんで超電磁砲が来るとダメなのぉ？」
ガクッ、と　本当に呆れたような動作をしながら
物分りの悪い幼稚園児に説明をするように、噛み砕いて説明しだす
「あのな、まずアイツの認識阻害は、周りの人間の脳内の電磁波を
弄くって
脳への届き方を変えるものなの、わかる？」
「うん」
「で、それは外から干渉してるわけだろ？
だから、その間に巨大な電撃が入ったらどうなる？」

「……あ、効かなくなっちゃうんだ？」

「そう、しかも超電磁砲は、その能力を使ったとなりゃあ
周囲5キロくれえまでの電磁的影響は考えなきゃならんと
樹形図の設計者も出したろう？
だから超電磁砲を遠ざける別部隊も出して、成功率を上げた
電波を阻害する能力者も置いて携帯で助けを呼ぶことも出来ないようにした！
そんな完璧な中でも駆けつけて助ける小さな可能性が、さっきの9割で
それが的中した場合は俺らの計画はすべておじゃん
人数的に無理が有るから戦闘員を回収することもできなくて、結局戦闘員は
アンチスキルやらに逮捕されることになるわけだ
だから家宅捜索が入る前にいろいろと回収しなきゃなんないの
わかった？」

「うーんとね……わかんない！！」

うだー、と男の悲痛な声が響いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6032t/

とある変体の重力制御

2011年11月7日14時43分発行